

浄土

五月号



法然上人鑽仰会

昭和十年五月廿日 第三種郵便物認可 (毎月一回一日発行)
昭和二十四年四月二十八日 運輸省(特別授受記録第三五二号)
昭和三十七年四月二十五日 印刷 昭和三十七年五月一日発行

第二十八卷

第五号

☆☆信仰の「泉」浄土トラクト☆☆

新刊 浄土トラクト

在家の方々の為の

村瀬秀雄著

浄土宗勤行の解説

新書版九〇頁
定価七〇〇円
送料二〇〇円

待望の書「浄土宗勤行式の解説」愈々刊行
旧版「浄土宗日常勤行式解説」を全面的に
改訂、版も持ち易い新書版として刊行

(百部以上五分引送料無料)

大正大学教授 佐藤良智著

真理のはなたば

新書版
定価七十円
送料二〇円

若き人びとにおくる仏教入門

青年会 婦人会に最適のテキスト

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

はなまつり用品

はなまつりのしおり

十五円

五色刷 B 6 版五枚綴

リボン付のかわいい施本

三〇部より単価十五円送料サービス
百部より 十三円

—みほとけのおしえ—

よいこのいっしゅうかん

三十円

花祭り／入園式／卒業記念の施本に好評
百部より貴名・行事記念名の印刷および
送料をサービスいたします

◇見本のお申込みは郵券でおはやめに◇

発行所 東京都千代田区飯田町2の8 大道社 振替・東京8247 TEL <332> 5944

浄土 五月号

まさしく蓮台に登らんまでは、
いかでかこのおもひはたゆむべき
法然上人御法語



中央アジア・アスターナの七世紀の
墓地で発見された副葬品で、悪霊の
土人形の頭部。彩色されている。

浄土 五月号 目次

表紙………兜跋毘沙門天像（京都 東寺）

マリア・ラーハと
サン・マルコ ……………佐藤賢順………（二）

児集 精薄 私の仕事 ……………中野隆雄………（八）
精薄 児の原因と対策 ……………吉田雅男………（二〇）

近代高僧伝 野沢俊岡 ……………大橋俊雄………（二四）

中国綺談 顔の輪廻 ……………牧尾良海………（二六）

小説 お酉さま（下） ……………一瀬直行………（三〇）

童話 阿波助とお坊さん ……………北村謙順………（三六）

実話 帰還船来る ……………吉野翠幹………（三〇）

しようきの話 ……………（二七） 童心仏心 ……………（二三）

五官に戸締りを ……………（二三） 扉の御法語 ……………（一九）

香りのない華 ……………（三五） 表紙の写真 ……………（二五）

聖典 講義 一に一たす二 ……………竹中信常………（三）



マリア・ラーハ 修道院

マリア・ラーハと サン・マルコ

佐藤賢順

マールブルクで開かれた国際宗教史会議に出席して、一週間を過したあと、さらに一週間は、主催側が計画してくれた見

になるであろう。細かいメモを取ってあるし、写真なども多数持ち帰っているのだが、余りたくさん見てきたので、メモを出しても、殆んど思い出せないものもある。しかしこうしてヨーロッパ諸国の寺院を見学して、プロテスタントといわずカトリックといわず、信仰の現状を実際に見てきたことは、仏教の現状と比較して考えるうえで、極めて有効であった。そのうちから特に印象に残っている二三を回想してみよう。

マリア・ラーハ

マリア・ラーハはライン河の西岸およそ六マイルの奥にあって、ボンまでバスで約二時間かかる。空気の澄明な平原に紺碧の水を湛えた静かな湖である。日本でいうと箱根の芦の湖の半分の大きさで、周りにはなだらかに起伏した

学旅行に出て、西ドイツの宗教事情を、つぶさに視察した。ドイツではマールブルクのエリザベスキルへを手はじめに、フルダ、フランクフルト、マインツ、ボン、ケルンなどの大聖堂を見た。ロンドンではウエストミンスター・アペーを、スペインではトレドの大聖堂を、イタリーではミラノとヴェニスとローマなどの大寺院を見た。アテネではギリシャ正教の教会を見たとし、カイロではイスラーム教のモスク（寺院）まで入ってみた。そのほか農村の小さな教会もたくさん見ているので、その数は何十ということ

丘陵が二三あるが、大たい平原だから芦の湖ほど氣象が鋭くなく、和らかな感じである。夏はキャンプ場として賑うらしいが、今は氣節はずれで、観光客もごくまばらである。この風光明媚な湖畔には、マリア・ラーハ教会とその修道院と、そこを訪れた人のためのホテルがあるだけである。

午後、ルクセンブルグ国境に近いトリールを立て、こへ着いたのが六時だった。丁度、夕方の勤行が始まる時刻だった。蒼茫と暮れかかっている美しい湖畔でバスを降りて、聖堂前まできて見上げると、正面にはロマネクス様式の塔が高く聳えていて壯麗である。堂内にはいると、はるか彼方の天蓋形の天井に、キリスト像のモザイクが描かれていて、その下が内陣で数段高くなっている。そこで今、夕方の勤行（ヴェルスペルスという）が始まっていた。黒の僧衣を纏った人達が、左右に居並んでラテン語の讃美歌をパイプオルガンの奏鳴に合せて合唱していた。幼い頃から音楽の嚴重な教養を受けている人達の合唱であるから、よく揃って一人が歌っているとしたか聞えない。壯重な抑揚が六時礼讃を想い出させた。差し当り日没礼讃というところである。六時礼讃といえ、ここでも朝四時の礼拝（マティンス）から夜八時のお勤め（コンプリン）まで、昼夜六時の礼拝がある。カトリックは儀式を重んずるの

で、嚴肅で壯重なことは仏教によく似ている。司祭は緋衣に金欄の袈裟をかけ、腰には珠数（ロザリー）を下げている。手には錫杖に似た杖をついている。内陣正面の十字架の前には蠟燭を点もし、花を供える。司祭は小さいバケツのような形の香炉で香を焚く。仏教の儀式と同じようである。儀式が終って退堂していく僧侶の数を数えていたら、五十人ほどであった。

この聖堂の近くにはホテルが一軒あるだけで、大勢は泊まれないので、分宿することになっていて、ここから四キロほど離れたベルという村までバスで行って、わたくしと密雄教授とは農家に泊った。農家の二階を少し改造して、修道院へ巡礼にきた人達を泊めるためのパンションにしてあるのである。その女の子に案内されて、家族の居間を通りぬけて、二階へ上っていくと、うしろで「ヤパン」という声が聞えた。噂しているのである。ベッドへもぐり込んでみると、ノックして人の入ってくる氣配である。BOACから派遣されたセクレタリーのK女史が案内されてきたのであった。われわれの部屋を通り抜けなければ、隣りの部屋へ行けない、という不便な作りである。K女史は、「あら、先生方でよかったですわ。同宿の人があるときいてきましたので、誰かと思って、心配でしたわ。」

といって、安心したように隣室に入っていた。ここの主婦が金属性の壺を持って上ってきて、この建物にはトイレットがないから、これを廊下に置いておく、といって降りていった。大へんなホテルである。なるほど翌朝になって、窓から外を見ると、牛小屋の隣りに原始的なトイレットがある。用を足していると、牛がヌーツと顔を出した。

翌朝は村のレストランで朝食を済ませて、八時からのミサに間に合うようにバスで教会へ行った。今朝のお勤めは聖体拝領式(コミュニオン)といわれているサーヴィスである。パンと葡萄酒を正面の十字架のキリストに供えたり下げたりして祈禱をつづけ讃美歌を歌う。信徒は白いヴェールを被って膝まづいて掌を合せて祈っている。われわれは遠慮してうしろの方で見ていたのであるが、マールブルクのホフマン教授が、もっと前へ出て御覧なさい、というので、前へ進んで見ていた。会堂の板のベンチは、どこの教会でも、堅くて冷たい。日本のお寺の本堂の畳の方がまだ柔らかい。感覚的な楽しさを享受する時代になっても、教会のベンチが劇場のクッションのようになったり、お寺の本堂に冷暖房の設備ができたりはしない方がよい。

コミュニオンが終ると、僧侶がパンと葡萄酒を持って、膝まづいている信徒のところに来て、葡萄酒にひたし

たパンを一片ずつ口へ入れてくれる。いうまでもないことながら、葡萄酒はキリストの血であり、パンは肉である。これを口に入ればキリストの聖体を拝受したと同じことである。

一しよにバス旅行を続けてきたイタリーの学者ペッツァリー女史も、白いヴェールを被って敬虔に膝まづいていたが、他の信者と同じように聖体を拝受して合掌していた。ヴェニスの人だからカトリック信者であることに不思議はないが、この中年の逞ましい体軀の女学者が膝まづいて一片のパンを口に入れてもらっている姿は異様であった。というのは、この女史は、マールブルの大会で、「中観哲学における空」というテーマの研究発表をして、なかなか評判だったので、インド思想に興味を持つほどの人だからカトリックには批判的かと思っていたら、信仰的には純然たる信徒であったからである。ヨーロッパではキリスト教は国教と同じなのである。

ミサが済んでから教会の内部と附属の修道院とを見学した。ここは十一世紀の末に創設されて、その後、幾多の消長があったが、今はそれをすべて案内記に譲って、ただこれだけを記しておこう。十四世紀には経済的に疲弊し、フランス政府の手に渡ったこともあるし、プロシヤ政府の管

轄に移ったこともある。十九世紀になって、また盛り返えしてベネディクト派の修道と神学研究の中心となった。今もベネディクト派の大本山というところである。現在の院長はバシリウス・エベル司祭である。修道院には百五十人くらいが修業する設備があつて、附属の農地はそれを養うに充分で、ライン地方のモデル農地とされている。お寺からすべて農地が取り上げられてしまつて、堂宇の維持どころか、徒弟の教育もできないままの日本とは雲泥の差である。宗教や学問の興隆には、その経済的基盤を確保することが重要である。



サン・マルコ大聖堂

内陣のうしろの裏戸へ廻ると、ここの開基のパレスティン・ヘンリー伯二世を納めた石棺があつた。カトリックの聖堂は大方は墓地を兼ねていて、堂内に墓がある。中庭にいくつかの墓があるところは珍らしくない。別棟の修道院

は見えて廻るのに足が痛くなるほど広い。修道僧の個室や図書室や食堂を一廻りした。どこもキッチンと整頓されて掃除が行き届いていたが、暫らくの快楽を捨てて、永遠の喜悅に生きようとする人達の周囲に漂う寒々しさがあつた。

ベル村へ帰って、竹中教授と一しょに、前夜泊った農家の近くの村有墓地を散歩した。キッチンと区劃が整理されていて、線香こそあがっていないが、どこも敷地内には花が一めんに植えられて、美しく咲いていた。亡き人に捧げる真心には、東も西もない。

サン・マルコ

ヴェニスのサン・マルコ大聖堂は、マリア・ラーハなどとは全く趣きを異にした観光寺院である。世界で名だたる大寺院といへば、パリのノートルダム、ロンドンのウェストミンスター、ミラノのドゥオーモ、ローマのサンペトロケルンのドームなどとともに、このサン・マルコも数え挙げられるであろう。これらの大寺は、日本の大寺が大きくて立派だというのは、全く違った大きさ、立派さである。ケルンのドームなどは十三世紀から二十世紀まで、七百年もかかって建造されている。このサン・マルコの壮麗豪華も話のほかである。

BOACが欧州旅行の日程にヴェニス三日間を入れてくれたとき、わたくしは、短い旅行期間にヴェニスで三日もつぶすのは勿体ない、と思ったほど、この都市についてはよく知らなかった。ヴェニスといえば、運河とゴンドラぐらいしか知らなくて、サン・マルコそのほかの中世から近世へかけての輝やかしい芸術的作品が数多く残っていることについては、知識がなかった。サン・マルコを見てヴェニスへ来てよかったと思った。

ヴェニスは中世には東洋貿易の要衝として栄えた共和国で、東洋の文化や物資がここに集ってきた。昔は海賊の根拠地であつたらしいから、この始まりは海賊文化であつたかもしれない。ヴェニスがイタリーに統一されたのは十世紀半ばを過ぎてからである。コンスタンチノープルが東方教会の中心となつてから、ビザンチン芸術が盛んに移入せられた。サン・マルコはビザンチン芸術で飾り立てられたお寺である。

サン・マルコはその名の示すように、キリストの弟子で福音書の記録者の一人であるマルコを祭つてある聖堂で、正面に石棺が安置してあつて「福音記録者サン・マルコの遺骸」とラテン語で刻んである。十字架のキリスト像はそのうしろにある。ここではマルコの遺骸が本尊というわけ

で、新教の教会が多くは十字架だけ（はりつけにされているキリスト像はぬきにして）を象徴的に使っているのは、かなり變つていて、具象的である。この聖堂の創立は九世紀で、アレキサンドリアからマルコの遺骸を改葬してきたのが始まりである。その改葬の模様が正面の四つのアーチに、モザイクで描かれている。（もっともそれは十七世紀以後の作品だが。）今の聖堂は十一世紀の後半に出来た。

ビザンチン様式というのは、方形の建物の上にドーム形の丸屋根を幾つも乗せて、内部は金属と色大理石でモザイクを組んでいくやり方で、実に手の混んだ豪華なものである。床に簡単な模様のモザイクが組まれているばかりでなく、丸形の天井の内部から、壁、柱まですべてモザイクで、燦然たる金地に、緑、紅、紫、青の大理石を指頭大に刻んで嵌め込んで、漆喰で固めていく。ところどころに色ガラス（エマイユ）が嵌め込んであつて、それが特に輝くという技巧も用いられている。五カ所の丸屋根があるが、それは堂内から仰ぐと、丸天井になつていて、そこにまた旧約の物語りやキリストの伝記や使徒行伝がつぎつぎに描かれている。下から見るとお椀の内側を見上げるようになるが、そこに描かれたモザイクは、こちらが見上げなが

ら歩いて移動するにしたがって、色彩の光り方が変わってきて、流動的な美しさを示してくる。壁画とは違った動態美である。天井も壁も一面のモザイクでなかには古拙なものもあって、それが却って雅味豊かに見えるのである。

わたくしたちは堂内で殆んど半日を暮した。中央内陣のうしろ脇には、日本寺院の位牌堂に当る部室があつて、三十センチくらいのガラスの瓶が並んでいる。金細工の装飾が上下に施してある。中にひからびて木乃伊^{ミイラ}のようになった片手や指が入っている。恐らく代々の祭司か聖人の遺体の一部であろうが、カトリックはこうしたものを聖物として礼拝するのである。金銀細工の宝物や、聖人たちの金欄の法衣なども沢山に陳列してあつた。

マリアがキリストを抱いている像が堂内に五六カ所はある。十字架のキリストの像も幾つかある。ブロンズの像の膝だけが、ピカピカに光っているのがある。これによく似たことは、ミラノ聖堂でも見たことだが、膝に病氣のある人が、キリストの膝をこすって、治してもらうように祈るのである。いずこも同じである。

冷々とした薄暗い廊下の片すみのマリア像の前には、何本もの蠟燭が点もされて、その前で若い娘が膝まづいてじっと祈っている。何を祈っているのか、永い間動かない。

聖堂の前はサン・マルコ広場で、無数の鳩が舞い降りては舞い上る。一方の側にはレストランが数軒あつて、戸外に赤や黄の椅子がずらりと並べてある。お喋り好きのヴェニス市民は、そこで何かを飲みながら、夜中まで、いや明け方まででもお喋りをしている。

泊ったホテルがこの広場を通らないとどこへも行かれない位置にあつたので、わたくしたちは毎日何度もこの広場を斜に横切つた。広場から大聖堂を見渡すと、正面アーチのモザイクが多彩に輝いて美しい。しかし遠くからみる全体の形状は、特に五つ並んでいる丸屋根の形状は、回教寺院という感じで、アグラのダージマハルが思い出されてくる。ビザンチン様式というものは、いかにも東洋的であるのである。

ヴェニスには百十八の小島と運河と八百の橋とでできていて、表通りは運河で、船が直接に玄関へ着くようになっており、裏通りは狭い往来で手車で物を運んでいる。だからタクシーもトラックもダンブカーもないから、自動車の排気ガスにわざわざいされず、のんびり呼吸しながら歩く楽しさがあるが、下水孔からコンクリートの舗道にブクブク上ってくる水の泡を見ていると、自分も水の中へ沈んでいくような気がして、心細くなってくる。(文学博士)

精薄児と共に暮す

私の仕事

中野 隆雄

私は昨年五月より東京都足立児童学園々長として精神薄弱児童の指導に飛び込みました。

の中心に置かれ、世の中を狭く小さくなって

生きて行かねばならないのです。

このあわれな姿を十数年間家庭相談、児童

相談で見せつけられて来ました。

私も浄土宗の念仏の流れをくむ者として児

童福祉司は仏の導きを子供達に伝えて幸福な

人間を作り上げる者として努力して来ました

が、この中から特に取りのこされて行く精薄

児こそ、慈悲と愛に依って人間としての本来

の尊さを充分に見出し一日も早く社会に復帰

出来る道を開いてやらねばならないと決意し

精薄児童通園センターに一生の仕事場を得た

わけです。

仏天の加護を頂き不幸なこの子等が社会人

として尊ばれ、認められることのあることを

祈りながら毎日子供達と手をつなぎ、世の愛

護の手の温いさしのべのあることを願っています。世の中の総べての人達の愛護の手がのべられた時こそこの子等に明るい社会が開き希望の社会復帰が出来るのです。

足立児童学園は国の精神薄弱児対策の一環として東京都が昨年開園したものです。

場所は東武線西新井駅の東側で六百坪からある土地に軽量鉄骨造りのツートンカラーの清しな百七十坪程の建物です。(足立区島根町七五一)

本園は児童福祉法による精神薄弱児の通園施設であって、都内の精薄児を保護者のもとから毎日通わせて独立自活に必要な指導を行います。い子供達の福祉をはかることを目的としております。

対象になる児童は知能遅れの子供でも特に痴愚と云われる(知能指数五〇―二六)知能欠陥のある児童です。そしていちじるしい性情上または身体上の欠陥のない子供で保護者のもとから通園出来る、満六才以上の子供です。

ですから普通の学校に行けず、又特殊学級にも行けない、就学を猶予か免除された子供

それまでは児童福祉司として児童の福祉向上の為、本人及其の家族の方々の相談相手として十数年の歳月を過して来ました。その間一般児童は一時大人達の手におえなくとも、俗に云う不良化しても何時かは正常な人間として社会復帰し貢献して行きます。然し精薄児の場合、家族は勿論社会の人々も唯だ奇異の眼でながめ仲間に入れてくれません。彼等は同じ人間の仲間になれながら世の中総べてから取りのこされ行くのです。一番身近の家族も精薄児に対する態度は冷めたく幼児期には猫可愛いがりし、大きくなると手におえずじゃま者にあつかい勝です。そして家庭問題

達です。定員は六〇名で私以下十三名の職員
保母で面倒を見て居ります。

園には大型バスがあり登園帰宅の送迎をし
て居りますがなかなか大変です。

これらの子供は精神薄弱だけでなく身体的
な面においても、又感情的、意識的な面にお
いても種々の障害があるので先ず健康の保全
と増進並びに運動機能の訓練に留意して、精
神の安定を得る様に努力し、自信と興味を持
たさせ各自の持っている能力を充分に發揮さ
せて社会生活に出来るだけ適応させるよう指
導して行くのです。

精薄児に光明を

通園バス内の交通道德の指導から、学園に
来てからは持物の整理や用便、うがい
手を洗うこと等、基本的生活習慣を身
につけさせる様にし、楽しい美しいチ
ヤムの音により講堂に集って朝礼を
致します。この時私は情操を自然に身
につく様、おはなし（童話）をやって
やります。精薄児は筋のある話は聞か
ないものとされて居りましたが、そう
ではありませんでした。よく話を聞い
てくれますし、ある程度の理解はして

くれます。お念仏の同行の方々が時々楽しい
お話や人形劇、紙芝居等でこの子供達の為に
「とても駄目だろう」といわれていた心の感
動性を与える指導に協力してくれますので子
供達は日増に明るく、開放的ながら自制心を
作り上げつつあります。

こうして情操教育を与え協同の作業の朝の
歌や体操、行進、言語の表現、数え方等を指
導し、指導室に入り絵をかいいたり、工作をし
たり遊戯やゲームをしたりして人間として与
えられた能力を呼びもどして居ります。

完全給食で毎月保健婦及栄養士により献立
が組れ、栄養を与え、食事のとり方や後片付
等の生活指導が行われて居ます。

なんといっても痴愚級の子供達ですから保
姆先生方の世話は大変です。一緒に食事をし
た慰問者が一辺で胃腸を悪くした程ですから
毎日世話する側は大変な努力がいります。で
すから大体信仰者でなければ務まりません。

食事の自立、排便の自立、衣服着脱の自立
等人間として最初に出来なければならない自
立性を毎日くり返し指導して居るのです。こ
の為には愛情の安売りは絶対禁もつです。子

供達の独立心を傷つけ、意志を増々弱くする
ことがあるからです。偏愛は子供達を将来性
格異常者にするおそれがあることは一般の児
童にも考えなければならぬ事です。特に
知恵おくれの子供達には注意しなければなり
ません。

痴愚級の児童を大体わかりやすく申します
と、児童の知能は四、五才程度です。例え年
令が十三才、十五才になっても物の考え
方ややることは四、五才位の子供の行為し
か出来ません。この様な不幸な子供はなぜ生
れて来るのでしょうか。私達は深く考えねば
ならないと同じに生ない様にしなければなら
ないと思います。統計や資料に依って見ても
或る程度はふせげます。学園では子供を保護
指導するだけでなく毎月親の教育に重点を置
いて両親教室を開き再びこの不幸な星を背お
わない子供を生む様に努力しています。

親の胎内に居る時、その親がヒールス性の
流感や病気にかからない様に注意し、母の心
痛がない様、例えば生活上の問題、家庭上の
問題等で母親が深い心痛におそわれる時、ど
んなに胎児に影響しているかを知って頂き、

精薄児に光明を

又栄養失調等にならない様、異常出産を出来るだけ早く医師と相談して是正することとか、乳幼児期に於ける栄養の問題、事故防止等、誰れにでも出来る予防についてじっくりと相談し指導しています。為に特に専門医及技師による相談指導を行う相談室も設けてあります。

開園当時暗いひねくれていた子供達も人間らしい開放と科学的観察指導と実際の指導により今日では明るく、活潑で、自分の持つ能力一ぱい行動しています。わずかの期間に子供達が手にした手芸品、工芸品が思ったより上手に出来る様になった事に親達は驚き、これがうちの子が作ったものかと涙を流しています。唯だ可愛想可愛想の連発で

なく、冷静に考える母親として強くならなければいけないと考えついた母親が沢山出て来ました。家に置いては伸びる子供も伸びずに一生を終る。親子共苦しいこのきょうぐうを一步步力強く切り抜けて行く努力こそ私共が導びかなければならないのだと考えています。

極楽の世界には差別はありません。仏様は平等に利益を及ぼされます。世の中から置きざりにされているこの子等に光明を与え人間としての幸福を得させ力強く生きさせることこそ念仏功德により救われている私共のやることと、深く御仏の前にひざまづきこの仕事についての因縁を得た喜びを感謝しつつ、不幸な精神薄弱という星を背おった子供達と手をつなぎながら歩みつつけて居る次第です。

精薄児の原因と対策

吉 田 雅 男

よく晴れた日に小学校や幼稚園等の近くを

通ると、必ず明るい歓声や、澄んだ歌声が、

自然と耳に入って来ます。そして元気に運動をしたり、思うままに喜々として遊んでいる子供の姿を目にすると、誰でも思わず微笑を誘われて明かるい気持になり、その一人々々が健康で幸福に過してゆける様にと祈りたい様な気持が湧いて来ます。まして子を持つ親ならば、吾が子に、「――髪を撫でては生長

の遅きを念い、膝に居いては成人の幸を願う愚にして愛深く、賢にして寵益々深し――」という念願を持ち、接する事は何人も変りないことでしょう。「この子の成人の日を見る楽しみがあればこそ、現在の生活の苦しさにも打ち克ってゆく事が出来るのです」という言葉は私共が常日頃聞かされる言葉ですが、そこには人間の真実が籠っていると思います。しかし、世の中には子供が日々成長する姿を見る度に苦しみを増す許りだという親達が多勢いるのです。いわゆる知恵の遅れた子、精神薄弱児を持つ親の苦しみは、子供が成長するにつれて深まって行く許りなのです。

かつて私が精神薄弱児施設として永い歴史を持っている「滝野川学園」を訪れた時の事です。丁度園舎の改築を行っている処でし

精薄児に光明を

たので、児童が園庭の日溜りで日向ボッコをしたり、そこいら辺を三々五々歩き廻ったりしているまことにのどかな光景が、門を入ると同時に展開されていました。しかし、よく見れば、声を掛けて挨拶しても何の反応も示さずに只一点を空つろに見つめる目、普通児の半分程しかない小頭、或は脳機能の欠損箇所を示す禿頭等、思わず目をそむけさせられる子供許りです。そこには健康な子供達の集団の持つ明るさも、躍動感の一片も見出せませんでした。その時私共の感じたものは「可哀想な子供達」という以外には何もありませんでした。

やがて園内に招き入れられて、副園長先生にお会いして、精薄薄弱児の生活指導、特殊教育の方法等、種々のお話をお聞きして、先生の精薄薄弱児達に対する愛情と努力に思わず頭の下がる思いをしたのですが、その時先生が私共に向って「あなた方は、ここに収容されている園児達を可哀想な、不幸な子供だと思いませんか」と質問されたのです。そして、それから次の様な会

話が交わされました。

「エエ、本当にそうだと思います。それ丈に、彼等に何とかして人間としての幸福を与える様に努力してゆきたいと考えています」「それは結構です。精薄児の問題は一人でも多くの人々に関心を持って載かなければ解決されません。しかし、彼等を可哀想だ、不幸な子供だと考えるのは間違っているとは思いませんか」「さア、それはどういう事なのですか」「人間が可哀想だとか不幸だとかいうのは、本人がその苦しみを知り、他から見てもそうだと思われる事だと私は思います。彼等には、自分を可哀想な人間だ、或は不幸な人間だと考える能力は始めから持っていないのです。ですから自分を不幸だと感じる機会は全然無いわけです。彼等を馬鹿にしたり悪事に利用したりしようとする人間達から全く遮断されて、同じ仲間と一緒に生活し、好きな、能力に合った仕事をしながら生活する事は、社会の中で種々の苦しみや喜怒哀楽に一喜一憂している人々と較らべたら、ある意味では幸福な人々だと云えるのではないでしようか。勿論こう云ったからといって精薄者

に対する福祉は充分に考えられなければいけないし、人間として生きる権利は主張されなければなりません。施設の拡充整備はその為には是非必要な事です。ですが、もっとあなた方に考えて戴き度いのは、彼等の親御さん達の方です。私は児童の入園を希望して来られる親御さんにお会いした時、何時もこういう質問をするのです。「貴方は、この子と道連れにして死のうと考えられた事がありますか」とね。その答は皆同じです。『何度そう思ったかわかりません。大きくなればなる程、そう思う日が多くなるのです』というのです。この答は、家族の事情、貧富を問わずそうなのです。そして、こうした苦しみの果てに、自分の恥を人に公開する様な気持ちで、此処に相談に来るのです。この親御さんの気持ちに対しては、可哀想に、とかいう丈で済まされるものでしょうか。自分が死に瀕する以上の苦しみののですよ。どうです。貴方方の考えは未だ未だ浅かったとはいえませんか」私共は暫らくは無言でした。今見た子供達の姿がもう一度目の前に浮かんで来るのです。そして先生の話に共感以上のものを覚えて、

精薄児に光明を

異口同音に「全くその通りでした」という以外に言葉を見出し得なかったのです。

その後園内を歩いた私共が感じる園内や、園児の姿は、始めて門をくぐった時とは一変していました。索漠とした蔭は無くなって、只管に与えられた環境の中で生きようとしている生命力の躍動が明るくこちらの胸に伝わって来るのが感じられました。

この施設では藤椅子、竹細工等の工作、兎鶏等小動物の飼育を園児にさせて居りましたが、彼等の仕事は丹念で飽きる事を知らないのですから、手を抜く事はありません。そのため良い製品が出来ますので商品としての価値も高く評価されています。亦動物の世話をするにしても、同情を持って接しますし、餌を与える時間を忘れたりする様な事はありませんから、彼等になつき、丈夫に育っていました。

その後、精神薄弱児の非行少年を主に収容している「東京医療少年院」を訪れた時にもこうした特徴をのばす様教育していましたが

矢張り普通の非行少年を収容する少年院とは異った明るさ、施設に収容されている為の安心感を感じたものです。

さて、精神薄弱児について少し述べてみましょう。精薄児とは知能がおくれている子供の事ですが、普通児では精神機能のうち知能という働きは十五、六才頃に発達をとげてしましますが、精薄児は、先天的あるいは後天的な、いろいろの原因によってこの知能の発達が抑せられているのです。その為に人格構造全体が特異なものとなってしまうのです。

知能の発達が悪いという事は、その基礎である脳の發育に障害がある事を意味しています。ですから脳の發育障害を起している原因が精薄児のおこる原因であるといえます。

その原因を挙げてみますと、遺伝的な原因としては次の様になります。一、両親や同胞のうちに知能の低いものが多くみられる者。

二、劣性遺伝の白痴児。三、新陳代謝に関するある特殊な遺伝因子のために生まれる者四、外胚葉を犯す遺伝性の皮膚病によるもの胎生期の障害としては、一、胎内感染、二、放射線による胎児脳の障害、三、最近新聞をに

ぎわしたRh因子で母体と胎児に同種免疫がおこった時、四、その他の胎生期障害、出産児の障害、後天的な原因として脳の炎症、脳の外傷、脳の変質性障害等が挙げられます。

しかし精神薄弱児の原因の内、七〇パーセントは遺伝性の精神薄弱で、その内でも、家族に知能の低い者が多かった型に依るものが大部分なのです。そしてこの型は他と比較すると知能程度も高く、身体的性格的にも、とくに著しい欠点はない場合が多いので、幼少時から適切に指導すれば立派な成績を上げる事が出来ますが、もしも放置されて環境の悪い影響を受けるととんでもない人格に成長してしまいます。それ丈に特殊学級等が是非必要になるわけです。知能が低いという事は必ずしも知能全体が低いのではないのです。精薄児では、ものごとを抽象化して考察してその本質に達する能力、一般知能といわれる能力が低いのです。ですから、具体的にみかんが三つある、自動車が三台あるという事は分りますが、それが抽象化して三という数が背景にあるという事が考えられないのです。しかし、運動や知覚の能力、音や色彩に対する

精薄児に光明を

感受性、記憶力、あるいは機械的な技術という様な特殊知能は普通人と同じである場合が多いのです。ですから、八幡学園の園児であった山下清画伯の絵の様に非常にすぐれた絵を画く者も出て来ます。最近ではテレビ等に山下画伯が絵を画いている場面がよく出て来ますが、その画き方は全く丹念です。ですから切り紙絵等の様に根気のいる仕事では傑作が出来来る事になります。しかし抽象画とか、文章を読んでその内容を理解し表現する様な挿絵を画く事は出来ません。ある子供に母が弁当のお菜に卵焼きを入れてもたせた処、その後弁当には卵焼きしか持たない様になったという報告がありますが、卵焼きという具体的なものと弁当が結びついていて他の御菜では弁当そのものの意義がなくなってしまうのです。一時流行した山下画伯の有名な言葉「兵隊の位」も抽象化して理解する事が出来ずに具体的な型で判断する為のものであった事がお判りになったと思います。

さて話を元に戻しましょう。戦前迄は精薄児を持った親は、それを自分の

恥として世間に出さないように苦しい努力を続けて来ましたが、戦後になって、こうしたやるせない親の思いが、ただ胸中に秘められたのみの苦悩から、同じ境遇にある人々と手をつないで、気持の上で温め合うばかりでなく、少しでも光明に向って、科学的指導を行ってゆこうとする悲願となり、その結晶として昭和二十六年に「手をつなぐ親の会」が結成され「手をつなぐ親の運動」が始められました。この親達の願いは世の中に与論を喚起し、精神薄弱児の福祉を計るばかりではなしに、その成人後の福祉をも含めた「精神薄弱者福祉法」を昭和三十五年に成立させる迄に至りました。

「分かたれた喜びは倍になり分かたれた苦しみは半分となる」事を知り、より多くの不幸な子供の為に力を併せた人々の労苦が、ここに実ったわけですが、これを押し進めた力は、子の幸福を願う親の心以外の何ものでもなかったのです。

菩薩行にも似た苦難に打ち克つ誠に偉大なものは親の愛であるといえましょう。

童心 頭がいっぱい

ボチの背中に小さなおできができました。

「困ったナ。はずかしいナ」

寝ても、起きてても、ボチはおできの事を気にかけて、クヨクヨと心配していました。まるで体の中も外も全部におできができていたみたい——

ばかなボチです。おできは背中のほんのちよっぴりなのです。そのほかのところは元気がいっぱい。目はちゃんと見えます。鼻はいろいろの匂をかき分けることができます。足は馬と違って競争ができるくらいに速く走ることができます。ボチはどうして元気なところに感謝しないのでしょうか。

「ほくは、こんなに元気なんだぞ。背中のおできなんか、はずかしくないぞ」といって、尾っぽをふって遊び廻らないのでしょうか。

少々痛いナ、嫌だナと、毎日おできのことを思い浮べていないで、薬をつけたら、あとは忘れてしまえばよいのに。

ボチに、よく教えてあげましょう。(淵)

近代
高僧伝

野沢俊岡

大橋俊雄

庄川と小矢部川の流れがつくったデルタが山の端にかかろうとすると越中国西礪波郡林村に、俊岡が野沢五右衛門の長男として生れたのは嘉永五年十一月八日のこと、本来ならば長男なるが故に家をつがなければならぬ彼であつたが、仏法のあつい越中に育つた彼は朝夕両親の仏前におつとめするあとについて手を合わせ静かに念仏をとなえていたそれが祖母の死にあうに及んで、子供ながらに無常を感じ出家したいと念ずるようになり万延元年四月九歳の時両親の許しをえて石動大念寺の徳問の門に入つて出家することになった。

その後明治二年上京して小石川の伝通院に掛錫し、引続き維新後何かと混乱したさ中であつて、神仏合併大教院の附属学校や宗学第二号弘教院などに学んで広く仏教学を究め、

同六年故山に帰り石動申義学校に奉職した。しかしここで空しくすごして果てんよりは東京に出、新しい文化に接し大いに活躍し宗門のためにつくしたいという大いなる望みをかけて再度上京したのは明治九年のこと、幸い縁あつて下谷泰寿院に入り、兼ねて伝通院学寮指月苑の寮主となつた。

ついで二十年五月浄台院に、二十八年九月には宝珠院、三十一年八月には光雲寺にと転住したが、その頃の伝通院住職は勤息義城僧正であつた。学者でその名一世に高かつた僧正は東京に京都にと出講し、とかく留守がちであつたから、寺務は俊岡があたるのを常とし、日夜その興隆に心をかけていた。ところが四十一年十月伝通院は祝融の災にみまわれ焼失し、ために僧正は当時京都にいたとはいえ住職なるが故にその責を負い、仮堂の建

立をまつて大正二年八月大恩寺に退いたが、その後任として一山寺院の興望をにない住職として選任されたのは誰あろう俊岡その人であつた。

曹つての世に徳川香華御宗門寺としての誇りをはなつていた伝通院も、明治の世を迎へるや其のバトロンを失い、広大な寺域を有するとはいへ檀林とは名のみで、彼が入山した当時は大変な荒廃ぶり。墓地はおろか境内までも草のはえるにまかせていたので、俊岡みずから草とりもすれば溝も掘る、徒弟をはげましてせつせと境内の整備に黙々とはげんでいた。その頃彼が「尾根の上のにせて梯子をとられたようなものだ」と述懐していたのもつてしても、如何に荒れはてていたかを察することができるであろう。その復興たるや容易なことではない。それに仮堂を本建築して大殿を建て庫裡も新築しなければならぬ。私財のすべてを投じて其の経営にあたり、経済的苦境の中にあつて良く再興の業をなしとげた彼の苦難たるや如何ばかりであつたらうか。

浄土宗学本校の窮状を見るにしのびず、こ



登でも同様で、その人たちの中には彼の名声を耳にして訪ねてくる者も多く、訪ねてきた人たちには心よく何かと細心の面倒を見、伝通院に留まる人も多かった。そのため人知れず、伝通院のことを「加能越の本山」と呼んでいた人もあったという。そのように人にしたわれ人情にあつかった彼は殊更に郷土をも愛していた。

れを芝天光院から伝通院山内に移し、又輪島聞声をたすけて淑徳女学校の創立につとめたのも、彼の時勢を諦観し宗門の復興をはかろうとした心情からであつたが、それにもまして彼が浄土宗全書の発刊にも手をかし、巢鴨女子商業学校の設立にも力を用いたのには、よく彼をたすけて其の成功の影武者となつた茅根学順のあつたことを忘れてはならない。学順あつての俊閑であり、俊閑あつての学順であつて、二人は共に心を一にして、かたく結びつけられていた。彼の生国越中は仏教信仰のあつた土地であつたから、志をたて僧侶修業を目指して上京するものも多かったが、それは越中ばかりではなく、隣国の加賀、能

れたものであつた。

本来彼はどちらかと言えば磊落な気性で、斗酒なお辞せずという方であつたが、医師のすすめを受けてからはビタリとやめたという芯の強い人もあつた。晩年に至るまで四時起床、冬でも薄氷を割って冷水に洗顔、自から大衆をばげまして一時間にわたり三部経を輪読、つづいて念仏勤行し、十時頃まで毎日かかすことなく本堂と開山堂で念仏を相続され、後を愛弟子木村玄俊にゆずつてからは唯ひたすら念仏三昧のうちに余生をおくり、昭和八年一月も末、臨終の近きを知つた彼は来迎仏を病床に安置し、五色の糸をもち、左手に念珠をくつて静かに念仏を相続していた。かくて日はめぐつて二月二日いよいよ臨終も近づき、念仏発声の唇の動きも次第に小さくなり、その動きが絶えんとしても左手の親指だけは念珠をくるかのように、かすかな動きをやめず、そのかすかな動きもやむと時を同じくして、大衆唱和のうちに眠るが如く大往生をとげられた。

時に世寿八十二、法名を大蓮社方普上人広阿仏華嚴俊閑大和尚という。



中国綺談

顔の輪廻

牧尾良海

昔、中国の京江の地に、趙曾翼という人があった。並々ならず才智に長けており、文思油然と湧き上って来るといふ風な人物で、當時の詩壇でもなかなか重視されていたのである。

ところが、鏡に己れの姿を映して見ると、実に御念の入った醜くい顔で、それこそ唾でも引っかけたくなる様な拙い面相だったのである。趙生は、いつも心中ひそかに己れの顔の醜怪さを慚じていたが、或る日のこと、遂に我慢がならず、真つ白な壁の上へ怒気たっぷり筆にふくませて、墨くろくろと一首の詩を落書したものである。

箋を投じて我れ閻君に問わんと欲す、
面目廬山恐らくは未だ真ならず。

若し左思陋相多しと説かば、
道旁果を擲げられしは果して何人ぞや？

この詩の心は、蘇軾という人は、識らず廬山の真面目、只身の此の山中に在るに縁のみ、と悟りすまして謳ってござるが、果してどんなものかねえ。「三都の賦」で盛名をほせた晉の左思は、えらく醜男だったとおっしゃりたいところでしようが、道を通るたんびに女どもからきやあきやあと騒がれ、ぶつけられた果物で乗物がいっぱいになったという晉の潘岳は、水も滴たる様な良い男だったというじゃあございせんか。一体、こういう造化の不公平ということについて、どういうおつもりなのか、閻魔大王にお伺いしたいくらいですよ。——こんな意味合いであろう。

趙生は、書き終ってからも格別に気がはれた訳ではなく、あいかわらず裏面白くないままにそこへごろりと横になって眠った。

夢の中なのであろうか、忽ちにして見も知らぬ土地へ来たものの様である。そこはまるで王者の宮殿の中の様で、傍らには立派な棟の長い家が三列も立ちならんでいる。その一つの家の欄間には、金色燦然たる扁額が掛けられており、文字は「面目輪廻」と読まれた。趙生は、どうしてこんな所へ来たんだろうと、驚ろいたままきょとんと周囲を見回していると、高い冠を被った道服の一人物が、何か大きな本を二冊手に抱えて、悠然と奥の方から現われ出て来たのである。

よくよく視ると、昔から親しかった康錫侯その人なのである。この人は元来浙中の名士で、絵画に巧みなために諸侯に招かれてはその賓客となった人であり、嘗っては趙生と杵臼の交際があった間柄である。二人は久闊を叙べ合い、近況を尋ね合ったのである。

康錫侯は、懐かしがって言った。

「そうですね、大兄は御存知じゃあなかったのですね、私は浮世を辞去してからという

もの、もう久しいことになりますよ。私は生前に画筆をよくしたということで、今では転輪王に召されてその幕客になっているという訳です。凡そ一切の衆生は、この私がその耳目口鼻を描いておいて、それから人間世界へ降生させているんですよ」

康生は、手に持っていた二冊の本を出して趙生に示しながら言った。

「大兄がこれを御覧下されば、私の画筆の苦心がよくお判りになりますよ」

趙生が先づ第一冊の方を見ると、表題に、

しょうきの話

唐土終南山の麓に住む人が、都に向けて旅に出ると、その途中で老翁が現われ

「我は昔仔細あって、悪魔を亡ぼし、国土を守らんと誓あり、君賢人を用い給わば、宮中に現じて奇瑞をなすべき旨を奏し給え」といった。その人は不思議に思つて、あなたは誰ですか、と問うと

「我はその昔進士の試験に志を遂げず、玉階に我と我が頭を打碎いて自殺を遂げた。そ

「貴者の相」と書いてある。ここに描かれてある顔は、何れを見ても醜く拙い面相ばかりで、ややこれに重くものを探しても、これ又ひげむくじゃらで色黒く肥え太ったものばかりである。

第二冊目の方とは見ると、「賤者の相」と題してあり、婦女子の様な美しい顔ばかりである。然も、眉目の間、何とはなしに秀氣に乏しく、各々顧りみて自らを憐れんでいる様にも見えるのである。

これはひどい皮肉だ！ 趙生は、むらむら

れにもかかわらず君の慈悲で及第し、贈官されたしょうき（鐘馗）大臣の霊である。その執心を讀み後世になお望あり」と

といって姿を消した。やがてしょうきは、

生前の姿を現わし、手に剣をとつて、禁裏殿廊下の下、御階の下までも忍び込み、鬼神を求めては退治し、国土守護の誓いを実行した

これは能の謡曲の大筋であるが、この話は中国の伝説によつたものである。即ち唐の玄宗皇帝が病氣になつて昼寝をしていると、その夢に虚耗という小鬼が現れて暴れまわつた

と怒りの氣持が湧いて来て、

「貴方は、人や物を思うがままに造化できる権限を握っておられるのに、何故この様に貴賤の形を入れ替えたり、美醜をまるで逆な様に描かれるのですか？」

と言つた。

「大兄ともあろうお方が、どうしてそんな卑俗な物の見方しかしないのですか？ 今を時めく台閣諸公の顔をよつく御覧下さい。その方々は、心のうち頭の中にあるものこそ立派なのであつて、外貌など問題ではないので

虚は空虚で、人の物を盗むことが、大好であり、耗は人の喜事を耗して憂とするものであつた。皇帝は大いに怒つて武士を呼ぼうとすると、にわかにな一大鬼が現れて小鬼を退治した。この大鬼は頭に破帽を頂き藍袍を着し、角帯をつけ、朝靴をはいていた。皇帝は驚き汝は誰かと問うと、「試験に落第して自殺したのに、緑袍を賜つて葬られた恩に感じて、我王のために天下の小鬼を退治した」と答えた。皇帝はまもなく病氣も癒えたので画人呉道子にしょうきの像を画かした。

すよ。立派で、偉そうに描いてやるのは貧賤

りませんか？」

の者たちへの謂わば餞けなのです。この連中と来ては、いつまでも困窮して立つ瀬もない哀れな者どもなので、せめて一副の好い面目を賦与してやり、上、貴人の愛寵に浴せる様に、又、下っては色町界限で少しは女の子にもてて惚れられたりすねられたりできる様にしてやっているんですよ。これこそ私が世の中を救う老婆心の一端であり、造形の至妙の術なのです。今、貴方のお顔を拝見するのに言い様もない貴い御人相とでも申し上げるべきです。若しそのお顔に手直しを加えて、いくらかでもみめよく修飾するとしますと、女の子にもてはやされる眼前の悦びが一寸増える程度のことで、恐らくいつまでも貧賤の世に沈淪してばかりいますよ。そんなことでどうして詩壇に文名を謳われたり、国家試験に合格したりすることが出来るのですか」

「いやいや、安仁山公は大酒を啖って千古に酒臭い名を残したし、衛叔宝は通りすがりのちんぴらやくざに殺られてしまったし、留候だって赤松子に従って行動したからよかった様なものの、そうでなかったら危いものでしたよ。つまるところ、形容の全きを求める者は、必ずや造物主の忌みを招くことになるのです。ですから、顔形などはどんなに拙くても、一生の真の福田を享受した方がどのくらい結構なことか、全く計り知れないものがあるんですよ」

趙生は、どんなに言われても納得ができずに、今はもう口をへの字に結んだまま返事もなかった。

康生はやむなく又言った。

「若し大兄が、御自分の福沢が減っても構わぬと考えられるのでしたら、大兄のお顔の形を少しは筆削してあげたっていいですよ」

趙生は、現金に喜んで、その方法はと訊ねた。康生は机の上の筆をとり上げると、趙生の顔に向って何か描いたり拭き取ったりしていたが、やがて、

「これで良いです」

と言って筆を擱いた。趙生は早速鏡を覗きこむと、前よりはいくらか男前になった様な気がした。

「もう少し、何とか筆削して下さい」

と頼みこむと、康生は、

「私と大兄とは、十年余りも親交があったのですから、もうこれ以上に筆を加えて、大兄が餓えて死ぬ様な人相にしたくはありません」

とて、断乎として筆を取ろうとしないのである。頼んだり、すかしたりで、二人が押問答をしていると、急に奥の方から厳しい警蹕の聲が響いて来た。

趙生は急いで外へ飛び出たが、その瞬間には、つとたたねから眠を醒ましたのである。

その後、趙曾翼の顔つきは次第に好くはなつたが、昔日、湧くが如く溢れ来った彼の文藻の泉は、だんだんと枯竭してしまつて、三十何年もの間、いつも国家試験には落第するし、もたもたと諸生のままで年老いたということである。

扉の御法語

ある時又の給わく、あはれ此度しおほせばやと。その時乗願房申て云く。上人だにもかやうに不定げなるおほせの候はんには、ましてその余の人はいかが候べき。その時上人うちわらひて、正蓮台に登らんまではいかでかこのおもひはたゆむべきと仰られけり。(諸人勸化の御詞、閑亭後世物語)

ある時、上人は今度こそ成しとげたいものである、と申されました。しかしどのような時に、何をなされようというのかについてはよく判りません。「諸人勸化の御詞」には上人の短いお詞が列記されていますが、どれもお弟子たちの耳にいつか深く刻み込まれたお詞ばかりで、従って前後の記述がありません。この場合も、時と事の内容が何んであらうともさしつかえのないことで、広く一般的に受けとらせて頂くべきお詞です。

「あはれ」はあっぱれという意味で、「し」は語調を強める言葉です。「おはす」は生ず、仰す、果す等の意味がありますが、ここでは果

すということでしょう。またある本には「おはせばや」と記されていますが、もしこの方が正しければ、「おはす」は有る、来る、行くという意味になります。何はともあれ、上人は「今度こそは」と強くいわれたことに相違ありません。

その時、長く上人に仕えていた乗願房宗源が、上人にして尚かつそのような頼りないことを仰せられては、われわれ如き者はどうなることすといいました。上人の一言一句をそのまま仏さまのお言葉として傾聴して、教えをいただいているお弟子たちにとって、上人が確信のなさそうなことを仰せにならぬようにと、親しい師弟の間ですから、冗談のようにならぬものです。

すると、上人は破顔一笑されて、申されたお詞が扉の御法語でした。「たゆむ」は油断するとか、怠けるといふ意味ですから「まさしく極楽に往生して蓮華の台上に登るまでは、今度こそは」といふ思いがなくなるものでない」といわれました。この世に生きている間は、常に怠ることなく一歩でも半歩でも向上すべきことを念願し、努力してゆくのが、当り

前のことであると、笑いながら申されました。乗願房は初め真言を学び天台を学びましたが、それでも満足せずに上人のお弟子になりました。勅伝には「上人につかへ、法義をうくること多年」とありますので、この会話は乗願房がすでにある年齢に達していた頃のものでしょうか。そして乗願房は上人よりも三十五才も若く、親子以上の親しさがあつたのでしょう。上人の側からいえば、上人はすでに六十とか七十とかの御高齢であつたと思います。

すると上人は、若い乗願房に向つて、今度こそはと期待もし、努力もすることは生きていく限り一生涯続くものであると教えられたわけで、御高齢の上人にして然りという点にこのお詞の有難さがあります。ここに同じようなお詞として次の御法語を思い起します。

「一丈の堀をこえんと思はん人は、一丈五尺をこえんとはげむべし」私どもは一丈の堀をこえんとするのにな、何んとか五尺とか八尺位のところまで済まぬものかと苦勞しています。若い乗願房はこのお詞を一生胸に刻んで、毎日を暮したことだと思ひます。



小説

お酉さま (下)

一瀬直行

彼の前にはからの徳利が三四本並んでいた
相手はスタンドの内側に少し体をはすにして

腰かけ、自分の盃を前にのんでいた。眼のふ
ちを赤くしている。お互に酔いがまわって来
ると親しみを増し、うちとけていった。

「こんな商売は初めてなの」

「そんな風に見えますか？」

それでも新橋のバーで働いたことがあると
いう。そういえば盃を持った時の手つき、煙
草の灰をおとす時の手つき、それを見れば、
水商売をくぐり抜けて来たことがわかる。が
そうした所で働いていた女に、よくみるよう
な、一種のあくはなく、まず勤人の妻君とい
うところであろう。

「この土地には古いの？」

「いいえ、浅草についてはなにも知らない

のです」

「そいつはやりにくいだろうな」

彼女は酔ったらしく、時たま関西なまりが
とび出した。彼には耳新らしく、どことなく
柔らかく響いた。とうとう浅草にまで流れつ
いてしまったというような、自嘲の影がそこ
にはさしていた。浅草の匂いでもするのであ
ろう。彼女は浅草に古くから住んでいるのか
と、きいた。

「古いの、なんのって、ここで生まれて、
この年まで生きながらえ、困ったものだ」

「それはどうしてですか？」

なぜときかれて、直ぐ返事の出来るもので
はない。簡単に説明が出来ないし、たやすく
理解してもらえないものでもない。それは直助
だけの気持で、他の人には通じないかもしれ

ない。困ったものだという考えは、終始彼に
付きまといていた。

「なんとかならないものかと思うんですけ
れど、一向に埒があきません」

「そんなことをいったって、まだ店をひら
いて、三月とたたないんだらう。何事も、そ
う思うようにはいきはしない。まずは辛抱と
いうところだろうね」

この女は愚痴っぽい方だなあと考えた。ど
んなに小さな店でも、開店当時は主人の覇氣
がすみずみまでゆき渡って、いきいきとして
いる。ところが、少しも感じられなかった。
それが第一いけないのだ。浅草では商売がや
りやすいという声と、やりにくいという声を
聞く。が、やりにくいという店には、直ぐと
欠陥が目につく。土地の氣心をのみ込めば、
浅草程商売がやりよい盛り場はないというの
が、本当ではないか。

入口に暖簾がかかっているが、ドアになっ
ている。女をおいたバーなら、これでもよい
が、「かもめ」のようなゆき方の店では、ち
よっと入りにくい。それにドア式なら、それ
相応の装いをこらしている。これだけでは、

あまりに雑っぽい。店が狭いのは仕方がないとしても、薄暗く、陰気臭い。それにこの頃の寒さだというのに、暖房装置一つ設けてない。

強いて店の特長をあげれば、周囲の壁に所嫌わずべたべたと色紙や短冊がはり付けてあった。和歌や俳句が書いてあったが、お世辞にも心ひかれる作はない。これでは膏藥だらけの醜い年よりの背を思い出させる。土地の者はこうした雰囲気の中で酒をのむことを喜ばない。まるであら探しに來たようなことになるが、これでは客がつかめない。自分の欠点はなかなか気付かない。外からみれば、直ぐわかることも、内側については容易にわからないらしい。矢張そこには無理をおしているのだ。だが、資金がなければならに、今の若い連中にも喜ばれる道がとれる筈だ。これでは万事中途半端にみえる。といって、そんなことをあげすけにいうことも出来なかった。

せてめ主人が余計なお世辞をいわないまでも、明るく客をもてなせばよいのだが、浮かぬ顔をしている。これでは本気でやる気が当

人にあるのかと疑いたくなる。

「こうした店の装いは、あんたの好みでやっているの？」

「……………」

どっちつかずの顔には淋しい微笑が浮かんでいた。こんな微臭いところに彼女の趣味があるとも思われない。思い出したように自分の盃に口をつけていたが、ふと氣を取直したのか、突然はやり唄を口ずさんでいた。ひどく声が若く、よくとおった。それは今はやりの俗悪な唄であった。うたいながら、彼に目をそそいでいる。心をからっぽにしているようにもとれた。

下が三和土なので足の方が冷えて顔がのぼせ、かなりのんだが、うまく酔いまわって來ない。それでなくとも小便の近い彼は、よく便所に通った。ふと立ったら、矢張酔って足がふら付いた。そのまま便所へ行って出て來たら、「どうぞ！」といって、彼女はスタンドの内側から蒸しタオルをひろげて待っていた。その手を引き寄せると、彼はいきなり接吻した。暫らくははなれないでいた。

よく彼はキャバレーやバーをのみ歩いて、

だらしなく酔った時、傍の女に冗談半分に接吻の真似をする。と、そこは上手に、「そんなことをしてはいけません」と、女の方でよけてしまい、それっきりですんでいる。今夜はのんだことはのんだが、自分を失う程酔ってはいない。そんな馬鹿な真似をする時は、相対すくではなく、側には大抵大ぜいの女もいれば、友だちもいる。というのに、これはどうした仕儀であろうか。誘うともなく、お互の唇が触れてしまった。

「悪かったね」

彼は照れ臭いやら、バツの悪さから、無暗と手酌で盃をあけていた。相手はうたっていた時とは、がらっと変って、自分の膝の上で眼をおとしている。ぶしつけな態度に腹を立てているのか。それならあんな風に目蓋をとじてのっちは來ないであろう。女の熱っぽさが消えない。

やがて氣不味い沈黙のあと、彼女は静かに顔を上げ、じっと彼をみつめている。二重瞼の大きな眼は、次第にうるんで來たが、またたき一つしない。彼は相手の視線をそらそうとまごついていた。と、涙が一滴頬をつたわ

って落ちた。

「なんだね。泣いたりなんかして、みっともないじゃないか！」

彼女は表情も変えないで、とめどもなく涙が流れ落ちて来た。さっきまでは酔って眼のふちが赤くなっていたが、多少青ざめて来た。色の白い方だが、白粉もつけなければ紅もひいていない。どことなくわびしい影がさしたほそ面に清艶味が加わっていった。泣いたりしてだらしがないといったものの自分でも空虚に響いた。拭きもしないでいるのを見かねて、彼はハンカチでやさしく濡れた頬をぬぐってやった。

そのうち気分を取直したのか、からの盃をさし出したので、彼はついでやった。ゆっくり口に含んで、なにか一つことを思いつめている様子であった。よくあるように酒癖の一つ、泣き上戸であろうか。それにしてはそれ程酔っていない。あんな不作法に驚き、酔いも手伝って、感情が激したのであろう。そこにはいうにいいない事情がひそんでいよう。そういえば相手の名前も知らないし、今日までどうして来たか、現在どうなっているか、

それさえ知らない。彼としても、そうしたことを酒の肴にしてのむことを好まなかった。

「今夜はお西さまでしたわ」

「そうだよ。浅草で商売しながら暢気だね今夜あたり稼ぎときだよ」

「だって、知らないんですもの」

「あんたには、お西さまときいても、一向興味がなさそうだね」

「話にはきいていますけれど……」

どうやら彼女の顔にも酔いが戻って来た。

思わず自らの弱みをさらけ出してしまったのであろう。そうした時こそ、人から乗ぜられやすく、危い。

「もう行っていりましたのですか？」

「竜泉寺町の通りまでは出なかったけれど千束通りを歩いて来た。随分人が出ていたねどこからこんなに人が集って来るのかと、不思議に思う位だ」

「そうですか。浅草も同じことでしょう」

「お西さまの晩といえ、余計賑う。浅草あつてのお西さまだもの。ゆきによってゆくか、帰りにによってゆくか、どっちみち一つも同じことだから、とても混雑するよ」

「だというのに『かもめ』はこんなですものね」

「わたしが蓋あけで、それっきりというの

「いやになってしまふ」

「自分から気をおとしては駄目だよ。まだそんな時間でもなし、お西さまの晩といえはおそくなる程人出が増すんだ」

いささかこれではひどいと思ったが、彼は元氣付けていた。まるで「かもめ」だけがお西さまの晩から取残されたようである。店の前は狭いが、いつもの晩と違って、がやがやと人通りが多かった。「かもめ」の両側は同じようなのみ屋になっている。酔った客が店の女とふざけたり、うたったりするのが、よく聞えて来た。近所の店に客が出たり、入ったりするのを見ると、彼女は一層気がいらいらするという。

「お西さまの晩はかかしたことがないけれど、吉原がなくなつてからは行く気がしなくなつたな。随分昔とは違つたものね。吉原はなやかな頃、お西さまの晩といえ、妻君や娘さん達が皆出かけて見物して歩いた。普段

そんな場所には行かれないもの。引き手茶屋とか、女郎屋とか、もの珍らしそうに見て歩いていった。店の中へ入って、並べてある写真を眺めたり、牛太郎やお女郎衆を垣間見たりして、好奇の眼を見張っていた。お酉さまの晩だけはとおっぴらだからね。それで又、一

五官に戸締りを

ウテン王はピンヅル尊者に教えを仰いだ。

「大徳よ。仏のお弟子たちは、若い身でありながら、どうして欲に溺れず、清かに身を保持することができなのでしょううか」

「大王よ。仏は私どもに向って、婦人に対する考え方を教えられた。それによれば、長じたるをば母と見よ。中なるをば妹と見よ。若きをば娘と見よ。この教えによつて、弟子たちは若い身でありながら、欲に溺れず、清かに身を保っている」

「大徳よ。しかしながら、誰の心にも貪りがあるから、母ほどの人に対しても卑しい思いを起し、妹ほどの人に対しても汚れた思いを寄せ、娘ほどの人に対しても淫な心を起すも

層販わったものだ」

「吉原だけは知らずじまいでした」

「その頃は皆熊手を買って帰った。殊に水商売や飲食店の主は、馬鹿でっかいのをかっいで、得意になっていた。毎年熊手は買いかえるんだ。若夫婦が世帯をもった頃は極く小

のです。どうして若い身でありながら、お弟子たちは欲をおさえているのでしょうか」

「大王よ。仏は、人の身体がいろいろの汚れに満ちていることを見よと教えられた。それゆえに若いものでも、清かな行いを保つことができる」

「大徳よ。身体を鍛え、心を練り、さらに智慧を磨いているお弟子ならばこそ、そのような考えと行いが容易にできるのかも知れませ

ん。しかし未熟な人にはそのように教えられなくても、その通りになることは容易なことではありません。汚れたものとみようと

さいのにしておく。一年ごとによくなるにつれて、少しずつ大きいのにしてゆく。そんな仕来りになっていたよ。熊手を買ってくれた客の縁起を祝して、若衆が揃って手じめをやった。今でもやるが、昔の方が威勢がよかつたな。長い間には風習も色々と変るね」

「大王よ。仏は五官の戸口を守れと教えられ。眼を以て色や形を見るし、耳を以て声や音を聞くし、鼻を以て香を嗅ぐし、舌を以て食べものの味を味うし、身を以て物にふれて何んであるかを知るのであるが、これらを五官というのである。その場合に好い姿に心を奪われず、よくない姿に心を苛立てないよう

に、よく五官の戸口を守れと教えられる。この教えによつて若いものでも、清らかに身を保持することができるのである」

「大徳よ、仏ののたまうところは、まことに奇特であります。それは私の経験によつても五官の戸締りをしないでもものに向うと、すぐに卑しい欲にとらわれます。五官の戸口を守ることは、私どもの行いを清かにする上に、まことに大切なことです」

「その頃のわたしはよく東京を知りませんし、子供でしたもの」

「そうだろうね。それ程遠い昔のことには思われないけれど。今でも一番思い出されるのは、大門前に並んだ馬肉屋もそうであったが、公園の中にあった牛肉屋でも、独特の雰囲気があったね。一家揃って一つ鍋をつつ付く。皆しがない暮らしの人達ばかりが客筋だった。親父は上機嫌に酔い、女房子供はこの時とばかりにたらふく喰う。そうした店の女中は所帯もちの年増が多く、いっときに大ぜいの客をうまくさばく。やることは荒っぽい、決して粗末にはあつかわない。見知らぬ客同志が内輪のように楽しく語り合っているなにか全体が一つにとけ合って、煮えくり返っている。今日ではそうした店が無くなったね。そんなところにも、お西さまの晩の特長があった。せっせと働く者にとって、お西さまといえ、楽しい晩だった」

「わたしにはよくわかりませんが、そうした点に、浅草の値打ちがあるのでしょうかね」

「そんなもんだけれど、こんな浅草の譚釈

をきいてもきみには面白くないだろう」

「そんなことありませんわ。これから店をやってゆこうというんですもの。色々と教えていただくなくては……」

「こいつは実際に味ってみなければねえ。説明だけじゃきき目が薄いんだ。相手にとけ込んでゆくことだよ。気どらないで、素直に懐へとけ込むんだよ」

「むずかしいわ」

彼女はわかったようで、わからない顔をしていた。左隣からは門付けのギターに合わせ客がうたっている。右隣からは流しの三味線に合わせて客がうたっている。時たま女の嬌笑がもれて来る。「かもめ」だけは両方から挟まれて、お通夜のようにしめっぽい。

「住居は別にもっているの？」

「ええ」

「遠いの？」

「そうですね。店まで小一時間はかかるでしょうか」

「そいつは毎日のこと、大変だね」

「不便ですわ」

「この辺に小店をもっている人や仲見世の

人たちは、大抵近くの馬道とか公園裏とかに住居を別にもっているよ。そこから毎日店へ通っているんだ」

そこへドアをあけて、二人の客が入って来た。どっちも若く、勤人風である。

「いらっしゃい。この間はどうぞ……」

「あの時は酔ったよ」

「お連れの方はどうしましたか？」

「今夜は来ないよ」

「御一緒にいらっしゃればいいのに」

「さては臭いぞ」

「そういう意味ではないの。変にからむわね」

例によって背を向けたまま一升瓶から酒をつぎ、薬罐につつ込んでいた。今までのことは忘れたように彼女は元気付き、酔った気配も見せないで、明るく客をもてなしていた。その様子は手ぎわよく、板に付いていた。

そろそろしお時が来たと、直助は勘定を払い、店を出た。かなり酔っている。それにしてもひょんなことになったものと思ひながら人込みを避け、路地裏を抜けていった。

写真の紙表

ミスター兜跋とばつ

兜跋毘沙門天像

京都 東寺

澄み渡った五月晴れの天空に、颯風を腹一杯吸いこんで泳いでいる鯉のぼりを見ると、誰でも子供の頃を思い出すだろう。近頃は少ないようであるが、田舎に行くと、鐘鬼や武将の幟を立てる。

数本立った幟が風にひらめいてる様子はお伽の国の紙芝居をみているような錯覚を起す。夢にまでみるこわい鐘鬼や強い大将が、子供の何倍もあるような武装した体を、風に踊らされる情景は、シネマスコープ以上の迫力があり、忘れられない強い印象を与えるに相違ない。

仏像の中にも動的なものが沢山あるが、一度見たら忘れられない異様なものは兜跋毘沙門であろう。写真の兜跋毘沙門は現在京都の東寺にあるが、東宝記によると、昔有名な羅



城門の上にあったという。それが事実かどうか

かはわからないが、この特殊な姿は中国の故事にもとずいたものである。つまり天宝年間に唐は西蕃に攻められた。そのときこのような姿の毘沙門天を造って都の城壁に安置し祈ったところ、無事に国難をまぬかれたというのである。毘沙門天はもともと北方を守る神として造られたものであるが、このような理由から兜跋毘沙門は国家を護る神となつて行ったのである。

こうして考えてくると、平安京の羅城門に安置したといういわれも、鎮護国家祈禱の根本道場であつた東寺に安置したというのも、問わず語りにその事情を説明しているものといえよう。

正面に鳳凰、側面に武装人物を刻んだ四万宝冠をかぶり、逆立てた眉、ギョット開いてつり上った目、キリット小さく結んだ口は、少々だぶつきぎみの顔をひきしめ、均勢のとれた体の表現により一層の効果を高めている。それにしても肩まである海老形の籠手こてとサロンエブロンともシミーズともつかない鎧に身を固め、左手に宝塔を捧げ右手に宝棒を握りながら、藍婆らんはと毘藍婆びらんはの寄り添う地天の

掌上に立つ姿は西域風の特色をよく出している。そこには堂々とした、しかも森厳な香りがただよってはいるが、何とはなしに、ミスター兜跋と呼びかけたくなるような親しみを感じ、洒落しやれた言葉が飛び出してくる。

この像が造られた唐時代は、最もこわい像の象徴であつたに相違ない。そしてこの思想は中国をはじめ日本にまで入って来たのである。ところが千二百年後の今日、偶然にも女性の肌着スタイルになつているのである。戦争のために作られ、さんざん敵を驚かした武器が、平和な社会の必需品として欠くことのできないお洒落の材料となるスタイルになるのであるから、ほほえましい限りであり、長生きはしたいものである。

何でも模倣の上手な日本である。そして何か変つたもの、刺戟を求める現在の社会である。このような奇抜なスタイルを取り入れたら成功しないともかぎらない。いやそんなことよりも、五〇メガトンとか何とかいってフルシチョフさんやケネディさんに聞かせたい話である。

鈴木成元

阿波助とお坊さん

北村 謙 順

難波（なにわ）の町—今の大阪ですが、そこに阿波助（あわすけ）という浮浪児がいました。阿波助は、いつの頃からかお父さんやお母さんとわかれて、あちこちとさまよい歩くうちに、この難波にきていたのです。

阿波助には権太と助三という二人の仲間がいました。権太はフトッチョでノソノソしていました。ですから権太のことを「フト権」だの、「ノロ権」だのと呼ぶものがいました。助三はチビで小利口です。でもやる事が尻ぬけになるので「ヌケ助」だの「チビ助」だのといわれていました。

ある晴れた日でした。

「どこへ行こうかな」

「きようは町のはずれの方へ行こうヨ」

「うん、そうしよう」

阿波助を先頭にしてフト権とチビ助が後をついて行きます。やがて農家が見えてきました。するとチビ助がいました。

「ネ、阿波助さん、いいものを、とってきてやるからネ」

「おい、大丈夫だろうナ」

チビ助はもう、向こうの方へとんでゆきました。

「お待ちどうさん。そら、これだ」

のぞいてみると、生のおいもです。どこかの畑のものを、やってきたにちがいありません。

「甘くてうまいヨ、たべてみな」

「そうか、よし、おれが分けるぞ。チビ助

は三ツ、権太は三ツ、それ」

「チエッ、阿波助さんはずるいや」

助三は不服そうにいました。

「ほくは向こうまで行って、とってきたんだゾ。自分は十もとったくせに、僕はこんなのをたった三ツか」

「ナニッ、十もとったというのか。よく見ろ六ツだけだ」

「六ツだって、十だって同じだ。僕たちよりか倍じやないか。ナア権太……」

「ウン、そうだ。そうだ」

「ナニ、権太、もう一べんいつてみろ」

阿波助が権太をニラムようにしていうと

「いや、なにも、いいはしないヨ」

「そうか、ヨーシ、チビ助のやつ、この頃

少し生意気だ。権太、チビ助をやっちやエ」

権太はしかたなしに立ち上りました。どう考えてもチビ助がかわいそうです。でも阿波助はこわいから、しかたがありません。

「オ、オオイ、す、すけ三、た、たて」

「なにするんだヨ、僕がわるいんじゃないよう」

チビ助はなきべそをかいています。権太はあの丸太ん棒のような腕をふりあげました。

その時です。「アッあそこにいるぞ」と声



がして、バラバラと三、四人の人がやってき
ましたからたまりません。アッという間に三
人とも縄でゆわえられてしまいました。お百
姓さんは天ピン棒や竹の棒をもっています。
これで一打ちに打ちのめされたら、もうおし
まいです。助三はガタガタふるえています。
権太はじっとしています。動けないのです。
阿波助は「たいへんなことになった」と思い
ながら目をつぶってじーっとしていました。

「皆さん、ちょっと待って下さい」

やさしいおちついた声が、頭の上でしまし
た。阿波助がハッとして目をあけて見ると、
そこには一人のお坊さんが立っていました。
墨染の衣で、わらじばき、首から袋が下って
いて、中は一ぱいにふくれ上っています。

「何をしたのかわかりませんが、見れば、
まだ十二三の子供のようです。おそらくは住
むに家もない子供たちでございましょう。私

が親に代っておわびもいたしますから、どう
か許してやって下さい」

お坊さんにこういわれると、お百姓さんも
かわいそうに思ったのでしょう「ヘイヘイ」
と頭を下げると引きあげて行きました。

お坊さんは、すぐ縄をといてくれました。
そして、ふかしたおいもを袋の中からとり出
すと、三人にわけてくれました。今度は生い
もではありません。ポコポコとよくふけたお
いもの味に、みんな我を忘れてたべました。

「さあ、もう行こう。そうだ、いっしょに
町まで行くかな」

三人は黙って立ち上りました。

「だいぶ、おなかですいてたようだね。た
べるのが早いこと、早いこと。そうだ。たべ
るものがない時は、私の所へくるといいな。
人のものをとるのはよそう。わかったかな」

三人はおとなしく「ウン」とコックリしま
した。

「おうちは、どこなの」

阿波助がききました。

「そうそう、それを教えてあげないといけ
ないな、さあ歩きながら話そう。天王寺とい

う大きなお寺があるのを知っているかい、あ
の近くなんだよ。そうだ、あした、天王寺の
門の所にくるといいよ」

「あした、あそこへ行くの。あそこは大ぜ
い人がいるね。塀にもたれてならんでいるよ
ゴロ寝している人もあるし、中には病氣の人
もあるよ」

「それに、みんなクサイよ。そばへ行くと
ブーンとしてたまらなたらん」
チビ助が鼻をつまんでいいました。

「大ぜいきているところへくるといいな」

「誰かに会うのかい」

「うん、みんなに会うのさ」

「みんな……」

三人が小首をかしげて考えていると

「さあ町へきたな。さあこの辺でお別れし
よう。さようなら」

お坊さんは町の道をスタスタと歩いて行って
しまいました。

さて、次の日です。天王寺の門の前に来て
みると、なかなか大ぜいの人があります。この
人たちは、その頃、あいついで起った地震や
キキンや火事などのために、家がなくなり、

食べものがなくなり、体をいためて仕事のできない人たちでした。動けばおなかがへるから、みんなじーっとして並んでいるのです。

すると、天王寺の門がギイーッと開けられました。三人でそちらを見ていると、大きなお釜が車にのせられて出てきました。湯気がフワッと立っています。「なんだろう」と思っていると、二三人の人の後から一人のお坊さんがきました。

「アッ、昨日のお坊さんだッ」

チビ助がいいました。そうです。昨日のお坊さんでした。手には、大きな鉢とおさじのようなものを持っています。お坊さんはお釜のそばへ行き、中のものを鉢に移すと並んでいる人たちの方にまいます。みんな急にえりを合せたり、すわり直したりガヤガヤとしました。お坊さんは一人一人におさじですくっては口の中へ入れております。おかゆです。ちょうどねている病人にたべさせるように、口へ温かいおかゆをたべさせているのです。中には手を合わせて拝んでいる人もあります。

三人は、しばらくおどろいて見ていました

が急に我にかえると、おなかがグーッグーッとなりはじめました。

「これはたまらん」

おなかをかかえたチビ助が、お坊さんの所へとんで行きました。権太もノソノソとついて行きました。

「今日は……」

チビ助と権太はペコリと頭を下げました。

「おお、きたかい」

お坊さんはニッコリと笑いました。お坊さんは二人の口におかゆを入れてやりました。

すると、阿波助が急にとび出して、

「オイ、俺のいるのを忘れたなッ」

と、チビ助と権太が先におかゆをもらったことに腹をたて、お坊さんのもっていた鉢をひったくると、ガッとチビ助目がけて投げたからたまりません。チビ助の頭に当って、鉢はガラガラと地にころがりました。チビ助の頭から血が流れました。阿波助はパッとびのくと、急いで町の中へ消えて行きました。

そのまたあくる日は朝から冷たい雨が降っていました。門前の人影も、その日はさすがにまばらです。みんな雨をよけて、どこかの軒

先にでもいるのでしょう。ただ、体の動かせない病人だとか老人たちは、どこへも行けないので、そのまま雨にうたれていました。

阿波助は一人で、塀にもたれ、足をなげ出したまま、じっと雨にうたれていました。きようは、チビ助も権太もきてくれません。きのうのことを考えると、それも当然のことです。二人はおかゆをもらったから、まだよいけれど、阿波助はなにもらわないどころかおかゆを叩きつけて帰ったのですから、お腹がへって動くこともやっとなです。仕方がないから雨にうたれるにまかせて、じっとしているのです。冷たい雨は容赦なく阿波助の着物をぬらし続けていました。いくら待っても、今日は門の扉があきません。とうとう夕方近くまで、そのままです。阿波助はぞっぷりと濡れて、髪の毛がベッタリと顔についていました。

きのうのこと、おとといのことが頭に浮んできます。不思議とお坊さんのことが忘れられないのです。

「これ、これ」

阿波助を呼ぶ声にハッと我に返ってみると

お坊さんが立
っています。

あの方です。

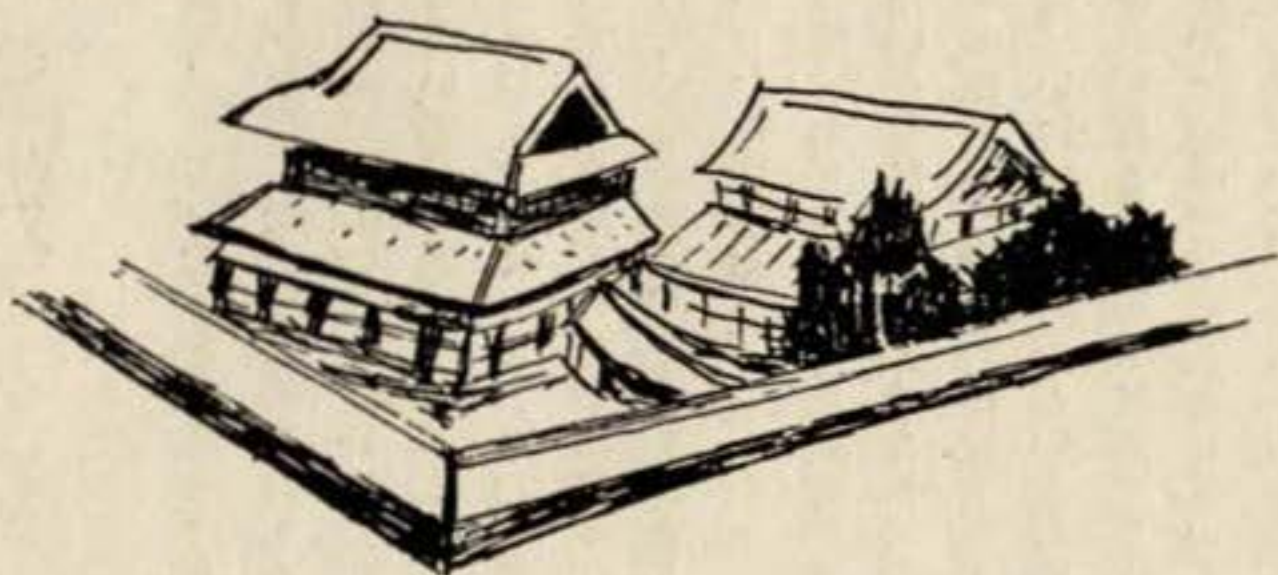
「あッ」

阿波助は思
わず顔をそむ
けました。は
ずかしい思い
がしたからで
す。きのうの
自分のしたこ
とを、お坊さ
んは怒ってい
ないかと、恐
い顔でいるか
しらと思い、
お坊さんを見
直すとニコニ
コしていました。

「おこっていないの」

とききました。

「おこってなどいないよ。だが小さい友だ
ちはかわいがらねばいけない。さあ、口をあ



けなさい」

お坊さんの衣から雨の滴がポタポタとおち
ています。アーンと口をあけると、おかゆが
口の中に入りました。思わずゴクンとのみお
ろすと、温かなスジがのどからおなかへ、ズ
ーツとおりて行きました。ちょうどお母さん
が赤ん坊にごはんをやるようだったので、阿
波助もお母さんのことをチラッと頭に浮べま
した。

「お父さんやお母さんは、心配しているだ
ろうネ」

「生きているのか、いないのか、わからな
いのです」

「そうか、そうか、はい」

二はい目のおかゆがのどを通ります。

「だいぶ濡れたな。ふいてあげよう」

「衣の袖で、阿波助を包むようにしてふいて
くださいました。阿波助は涙がこみあげてき
ました。

「どうしたね。淋しいのだろう」

「きたない僕みたいなのを、ふいてもい
いのかい」

「きたなくても、よこれていても、仏さま

の子供にかわりはないのだよ」

「えッ……」

「わたしのお父さんは、わたしが九つの時
になくなったけれど、その時わたしを呼んで
いったことを、わたしはおぼえているのだ。
人をにくまず、みんなかわいがれとな」

「でも、僕にはできない、そんなこと」

「そんなことはないよ」

「でも、でも僕はいもを余計にとったり、

チビ助に鉢を投げたり、だめなんだ」

「そこに気がついてくれたか。それが大事
なんだよ」

「許して下さいますか」

「許すも許さぬもないよ。お月さまはよく
ご承知だろうよ」

阿波助はお坊さんの袖に顔をうずめてさめ
ざめと涙をこぼしました。お坊さんは、しっ
かりと阿波助をだいて下さいました。

雨がいつかやんで、晴れた夕空にお月さま
がかかっていました。

阿波助は、それから一生の間、お坊さんの
そばを離れずにすごしました。このお坊さん
は法然上人でありました。



ラーゲルの思い出 第十話

実話 帰還船来る

吉 野 翠 幹

人間はもとより、どんな動物も鳥類も、とても住めないような荒野を、帰還列車は走り続けた。いかに列車の中にいるとはいいいながら、見るもののない毎日を送っていると、やはり気持まで荒々しくなるようであった。停車時間を利用して、アカ旗その他の合唱やアジ演説ばかりしていたのでは、オルグ団としては物足りなかったであろう。

それよりも彼等にしてみれば、反動は内地に帰すべきでないと思われたに相違なかった。そこで帰還列車の旅という最後の機会を見逃す筈がなかった。いわば背水の陣といった感じの最後の説得が開始されたのも無理でなかった。従って反動は途中で下車させるという情報を十分に流しておいて、一人一人をオルグ団に呼び寄せたのであった。

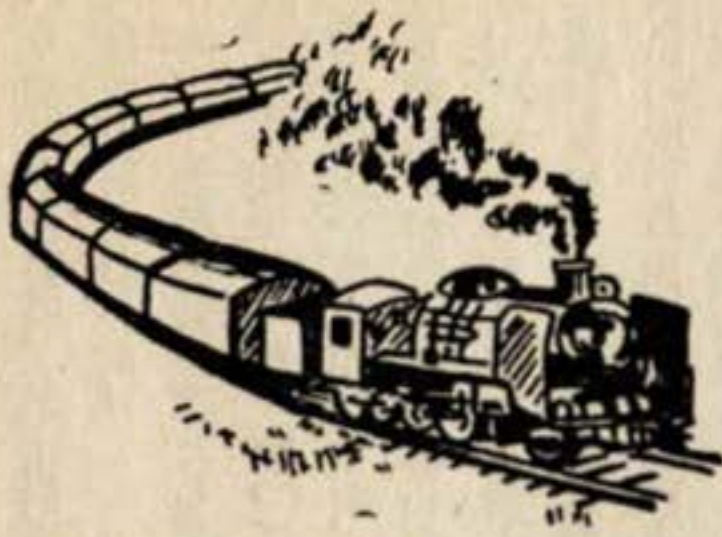
私は呼びにきた若い伝令の後に従って、停車中の列車のわきを歩いて行った。各貨車の入口からは幾多の眼が私たちを見送っていた。おそらく連行される犯人のように見えたかも知れなかった。やがて炊事車の横を通りすぎると、それから四、五輛目がオルグ団の車であった。私はここにくるまでに、オルグ団車はずい分と賑やかであろうと想像していた。彼等にしてみれば、ソ連に忠勤をはげんで功成ったわけで、得意さうに議論をしていると思った。敵は大勢味方は一人というのは、全くこのことで、どんな質問を受けようとも、毎度のことながら反ばくしまいと考えていた。かつて大勢のオルグたちの前に立された経験があるので、いよいよ最後の土壇場において吊し上げをくうものと覚悟していた。

ところが私の予想と全く反対に、オルグ団の車はひっそり静かであった。しかも金子少尉が一人いて、そのそばに私の知らぬ若い兵士が坐っていた。結局伝令と私とを加えて四人だけがこの貨車の人となったわけである。私はこの車内の空気にホッと安心した。それにもまして私の氣を楽にしたのは、相手が金子少尉であることであった。

金子少尉とは、これまで二、三回の面識があった。彼は中野区で旅館業を営んでいたという幹候出身の将校であった。彼は長身瘦軀で、性格もおだやかであった。決して自分の意見を相手に押しつけたり、相手の話に腹を立てたりしなかった。いつもオルグ団の一員としては卒先して活動し、弁論もよく立ったが、それでいて反動なるがゆえに直ちに敵視

することをしないという、彼等の仲間には珍しい好青年であった。この車の責任者に金子少尉が選ばれていたのは、彼の説得力が買われたためか、大事をとっておだやかな彼をすえたのか、それは私に判らぬが、とにかく私にとっては気安くほんとのことがいえるように思われ、ここにくるまでの嫌な気持をなくしてくれた。

金子少尉は私に対して、多くを語らなかつた。ただ今以て私が共産主義に賛成署名をしないのか、できることなら素直に署名して欲しいというだけであった。それで私も静かに言葉少く答えた。



「その問題であつたら、もう止めてもらえないだろうか。主義主張の理論について、ここで君と討論する気持は全くないのだ。アングレンという一局地に

過ぎないが、君も私も同じ場所で暮し、同じソ連人に接してきたのだ。同じ環境で同じことを見聞して、君は共産主義に賛成した。このことはもちろん結構なことだと思っている。しかし私は賛成しなかった。この私に対してもし方がないのだと思ってくれないだろうか。それなら何故私は君と違う道をとったか。

それを私はいいたくないのだ。君がどうしてもいうなら、私の話が或いはソ連の悪口となるかも知れない。ここでソ連の悪口をいえるものかどうか、君のよく知っている通りである。但し君が、私をどうしても内地に帰したくないというなら別であるが、私に何もいわせないでくれまいか。

いつか君からゆっくり君の主張をききたいものだ、お世辞でなくほんとうに望んでいる。そして私の意見も是非君に聞いて欲しいと思っている。幸い私が君と一諸に乗船できたなら、船がソ連の領海外に出たとき、二人きりで十分話し合おうではないか。自由に思いきり自分の考えの述べられる時まで、今日の議論を保留してくれないだろうか」

私としては、金子少尉の報告一つで、列車

から降されるといふ被告の立場であつた。私の言葉をどうとったか、私は彼の顔色を穴のあく程見つめていた。しかし彼は黙ったまま視線を遠く曠野にはしらせていた。列車はいつか動き出していたので、次の停車まで、私は彼の前を辞することができなかった。重苦しい空気の中で、私は車輪の響に耳を傾けていた。

すると伝令にきた方でない、もの一人の若い兵士が私に話しかけてきた。

「あなたは戦争中、隊長として部下のために働き、お国のために命をかけてこられたのでしょう」

「……それで……」

「そのあなたは、今度は大衆のために働いて欲しいとお願ひしているのに、何故それができないのでしょうか」

金子少尉が目で制したので、彼はそれ以上いうことを止めた。彼は金子少尉をさしおいても、反動と呼ばれる私に対して、自分の怒りをぶつけずにはいらなかったのである。私は若い彼の短い言葉に心を打たれてしまった。若々しい熱情に燃え、目を輝かせて

いった彼の言葉に、私は崇高なものを感じずにはいられなかった。

彼は特別幹部候補生として少年航空兵を志願した兵長であった。かつてお国のために滅私奉公を誓って出陣したが、それから五年がたってしまった。彼が物心のついた時分にはすでに戦争も末期症状を呈していたし、社会全般が異状であった。軍隊の内部すら、これがかつての軍隊かと思われるような欠点ばかりがつのって不快なものとなっていた。こうした経験しかない彼が、ソ連で教育され、一つの方程式を信じ込んだにしても無理ではなかった。

日本は天皇を頭とする資本主義国家であって、大衆を搾取し、大衆を貧しくし、大衆に自由を与えぬ国であった。日本の選挙は、形式こそ普通選挙でも、買収と弾圧以外のものでなく、資本主義に奉仕するものであった。若し大衆に味方する者があれば、直ちに刑務所に放り込まれた。日本の軍隊は資本家の利益のために存在し、外国を搾取するために侵略することを目的にした。ソ連の軍隊は、若い時代のソ連を侵略した仇敵を撃つと同時に

日本を解放してくれたので、ソ連軍隊には心から万才を送らねばならなかった。現在のソ連は共産主義国家という天国を形成するため努力している。従って天国の実現をみるまでは、いかなる辛苦も乗りこさなくてはならない。われわれ同志は、日本大衆のために偉大なるソ連と確く手を握り合って、革命を起すのである。

若い者は純真である。この若い兵長も、戦争で失なわなかった一命を、大衆のための革命に捧げ、今こそ革命の戦士として日本に敵前上陸するのだという信念にもえていた。

列車は二時間ほど走って水を補給するため停車した。私は金子少尉と分れて、自分の車の方に戻った。長い列車のそばを歩きながら、私の気持は鉛でも呑んだように重かったあの時、嘘でもいいから「私も君等の仲間に入って、大衆のために闘いたい」といったらあの兵長がどんなに感激したことであろうと思った。それにしても白紙のような若い頭脳に、一方的な教育を施した者こそ呪われてよかった。

くる日もくる日も、列車は走り続けた。や

がてノヴォシビルスクで、シベリア本線に入った時から、沿線の景色がまるで変わった。そこには青々とした草木があり、人家があった。今までは北に北に進んでいた列車が、東に東に進むことになった。それと同時に、問題のハバロフスクも近づくわけであった。日本新聞（日本語の新聞）もこの地で編集発行されているといわれる位に、日本の共産主義の中心となっていた。そして反動はこの地で列車から降り、教育を行うということであった。従って少なくとも私にとって、ハバロフスクを通過しないことには安心できないのであった。往路にはあれほど騒いだバイカル湖もチタ地方も全く興味がなかった。日一日と日本に近づく感じと、列車から降ろされる日が目の前に迫ってくる恐れとが交錯して少しも落ちつけなかった。

いよいよハバロフスクを通過する日になった。私は朝からいても立ってもいられない気持であった。その日に限って列車の速度をあげて走っているようであり、時間のたつのが遅いようでもあった。その内に日が暮れた。車内では毛布にもぐり込むものが多かった。



午前一時頃にやっと月が出て、あたりが明るくなった。午前二時頃列車が停った。そこは操車庫でもあるらしく、幾本もの線路があった。私は静かに車を降りて、列車の周りを歩いてみた。暗い電灯があちこちにあるだけで、人の気配は少しもなかった。真夜中なので、ハバロフスク本部との連絡は明朝になるかも知れぬと考えた。

いつまでも外にいるわけにゆかぬので、ま

た車内に戻った。私は独り床に坐ったまま、耳をすませていた。するとコトリ列車が動き始めた。私は線路の入れ替えが始ったと思った。ところが列車は一度動き始めると、段々と速度をまして行つた。そしてそのまま走り続けて行つた。列車はハバロフスクで何事も起らずに、夜半発ってしまったのであつた。私は大声を出して叫びたい衝動にかられた。真暗な車内にあって、私一人笑いがとまらなかつた。

このようにして、帰還列車は、アングレンを発つてから二十五日を経過して、無事にナホトカに着いた。

ナホトカで下車すると、長い汽車の旅のおかげで足がふらついた。しかし一同は意気たからかに割り当てられた宿舎に入った。その建物は古いものだったが、内部は二段ベットで、ゴミ一つ落ちていない位にきれいであつた。しかしその理由は夜になって判つた。つまり南京蟲が多くて、とても寝るわけにゆかなかつた。恐らく誰もがしたように、私たちも早速外に出て、建物のそばで野宿した。ナホトカにはどの位の者がいたのか、多分万

を以て数える程の者であつたろう。しばらくすると宿舎の移動があつて、いよいよ日本海のみえる場所に移つた。

ナホトカには二週間位いた。その間に再び奥地に追いやられた者もあつた。「聞の話」で述べたように、私が糞尻プールに終日つかつていたこともあつた。「同志諸君、日本に敵前上陸する日は刻々に迫りつつある」との演説を聞いたこともあつた。スターリン宛に連名で感謝電報を打つたこともあつた。ソ連万才を三唱させられたこともあつた。しかし海の風に当りながら、船の来るのを待っている毎日は、どんなことがあつても苦にならなかつた。沖では毎日ソ連の掃海艇が行ったりきたりして爆雷を投じていた。

ある日、水平線に船影が見え、首を長くして待っていると、ますます船が近づいた。遂に日本船がきたのであつた。やがて船は岸壁につけるため、前進後退を始めた。甲板上に行きかう船員の白い服が、目にしみるようにスマートに見えた。誰かが「どうだ、日本船の操縦はうまいものだ」というと、また「船員の服装をみよ。立派なものじゃないか」

と感心する者があった。

これまで「日本新聞」によって内地の様子を知らされていた。それによれば内地は家もなく食もなく、困窮していると報ぜられていたので、誰もが故郷の人々を案じていたのであった。それを今日の前で、堂々たる船員をみて、「日本新聞」の報道が嘘であると思つて急に安心した嘆声であつた。また船尾の方からは「日章旗」だというどよめきが起つた三年何月ぶり、国旗を仰いだわけであつたフト気がつくと、私の側にいた若いオルグの目に涙があつた。彼も人の子、日本を思い出したのであらう。

いよいよ船が岸壁につくと、甲板で働く人たちの顔まで見えた。

「あれは何んだらう」

「あれは沢庵だヨ」

「何、沢庵が食えるのか」

「そうすると、味噌汁もあるゾ」

またしても歓声でどよめいた。

乗船の終つたのは夕暮れ近かつた。しばらくソ連のランチが見送ってくれたが、やがて手を振りながら離れて行つた。さあ、これで

初めて日本に帰つたと実感がわいた。

終戦直後、将校と下士官共は全く隔離され将校は将校だけの一団としてソ連に拘留されていた。ただ私たち一部のものだけが、大隊長、副官、中隊長として千名単位の大隊に配属されていたものである。ところが私たちがナホトカに着くと、二三日して将校団もナホトカに着いた。従つて急に将校の数が増したわけである。

乗船部隊の編成は階級によつて行へというソ連の命令に従つて、梯団長は軍医少佐がなり大垣中尉や金子少尉等のオルグ団は副梯団長となり、ラーゲル当時の副官近藤大尉が中隊長となり、炭坑大隊に一諸に追放された大宮大尉が分隊長となり、私はその分隊の列兵となつた。

この船が敦賀に入港するまでの四日間に、船中をあげて血腥い大混乱に陥入つた。この大騒動については、かつて「暴力の船」として本誌にのつたことがあるので、その大要を簡単にふれることとする。

船がナホトカを出航すると、間もなく日が没したが、洋上で第一夜を迎え、その夜が明

けるまで、甲板上で反動の一団が荒れ狂つた。そのため大かたのオルグたちは、足腰のたたぬ位に痛めつけられてしまつた。反動たちにこうした暴行計画が、以前からあつたものかどうか判らない。最初異様な物音を聞いて、私が甲板に上つてみると、「隊長、危いから下りて下さい」といわれ、また船倉にもぐつてしまつた。鉄材ばかりの甲板であるから怪我人も多く、あちこちでうめき声が聞かれた。第二日目の昼間は、終日吊し上げが行われた。今度は反動がオルグの首脳たちを吊し上げたのである。反動たちはラーゲル当時にされた通りに行つたわけである。

第二日目の夜になると、前夜と同様に反動たちが再び荒れ狂つた。夜半すぎに非常呼集があつて人員点検が行われた。海に投げ込まれた者はいないかという心配からであつた。この夜はオルグの首脳たちが狙われたが、中でも大垣中尉が最も憎まれていた。ほんとに大垣を内地に帰すなというのが合言葉だらしかつた。そのため、若し数名の船員たちの通りかかつたのがもう少し遅かつたら、大垣中尉はほんとに海に投げ入れられていた。

大垣中尉の身体を、反動と船員が引き合ったということであった。これに驚いた船長は、主だったオルグを全部保護検束してしまったおかげで人員点呼の時にいなかった者は船員室に保護されていたことが判った。

そのあくる日、つまり三日目の朝、近藤大尉が私のところにきて、梯団長の命令だから私に副梯団長になれといった。私は副梯団長に事故が生じたら中隊長が代行すべきであるし、それができなければ先任将校になるべきだといってことわった。私にしてみれば、折角列兵として呑気にしているのに、何の副梯団長だといったところであった。しかし近藤大尉は諦めずにいろいろと私を説得するのであった。私も朝鮮以来懇意にしていた上官でもあるので、しぶしぶ承知をし、梯団長室に行った。誰と誰が副梯団長であったのか、火の消えたような一室に幾人かが身体を横たえていた。すると隅の方から大垣中尉が私の前にきて

「私が悪かった。今までのことを考えると全く申訳がない。宜しく願います」

という意味のことをいい、私に両手をついて

頭を下げた。今更大垣中尉に謝まれたところで仕方がないので、いい加減の返辞をして何んとか部屋のまん中に坐っていた。

もちろん私が副梯団長になったためでなく反動も疲れたからであるが、その日も、その夜も騒動が起らないですんだ。

第四日目は日本の陸地、懐しい山々が見え敦賀に近づくにつれて人家も見えた。

その頃いつ乗り込んだのかアメリカ軍がいて、私たちに上甲板整列を命じた。狭い甲板にギッシリ列んで、副梯団長たる私は、アメリカ軍の案内でもするのかと考え、艦橋の方に急いだ。

すると二、三人のアメリカ将校の後から大垣中尉が従って歩いてくるのに出会った。いづれが副梯団長にもどったのか知らないが私は黙って大宮分隊の方にもどって行った。誰か知らぬが、後の方から

「隊長、上陸してから面白いものを見せませう」

と声をかけるものがあつた。

(カット・久保かの子)

香りのない華

言葉だけ美しくて、実行の伴わないのは、色あつて香りのない華のようなものである。

美辞麗句はまことに耳に入り易い。耳に快よく響くものであるだけ、なおのこと気をつけねばならない。言葉を特に飾る場合は、内容が乏しいために、言葉の上で苦心しているのだと思つて間違いがないようである。

その反対に不言実行は、常に人の信用を勝ち得るものと信じてよい。真に実行し、実行する自信のある場合は、あえて言葉を飾る必要がないのである。

いかに言葉が美しくても、それだけで価値が生ずるものでない。言葉があつて、それが実行されて初めて、そこに効果が生れるのである。香りのない華を眺めるのと似ている。実のならぬ花を大事に育てているようなものである。

世の中にお世辞の上手な人と下手な人があつる。もし長い交際を結ぶ相手であつたなら、お世辞は百害あつて一利すらない。



選択集私解

その十一

聖典
講義

一に一たす二

竹 中 信 常

一、岩を射る

虎とみて岩に立つ矢のためしあり

木陰にうずくまる黒い影。あつ虎だ。そう思った瞬間、

ひょうとばかりに手なれの弓を射た。ぶすっと手ごえたがあつて、見事矢がこれを射ぬいた。近づいてよくみたら、虎にあらず一塊の岩石の真中に、深々と矢が射込まれていたのである。ひとの一念、こうと思って信じこむ、その力はかくばかりに強靱無比きょうじんむひなものなのである。

「執念の鬼」ということもいわれるが、自分の想念を一つのものに凝らして、最後まで押しとおしてゆく。ことの是非善悪はとも角として、その気魄には鬼気せまるものがある。そうした精神力というか、迫力というか、とにかくそこには鬼神も避けるものが漂よっている。しかも、このような精神力の裏づけになっているものが、単なる一個人の想念——恨らみとか、いかりとか——といったものでは

なしに、ひろく、大きい、宗教的信念である場合、それは言語を絶した、原爆の如き巨大なエネルギーを発散するものとなる。

阿弥陀経の中ほどの文に

「少善根福德の因縁をもつて、かの国に生ずることを得べからず。舍利弗、もし善男子善女人ありて、阿弥陀仏を説くを聞きて、名号を執持（しゅうじ）すること、若しは一日、若しは二日、若しは三日、若しは四日、若しは五日、若しは六日、若しは七日、一心不乱なれば、その人命終の時に臨みて、阿弥陀仏もろもろの聖衆とともに、その前に現前したまう。この人終る時、心てんどうせずして、すなわち阿弥陀仏の極楽国土に往生することを得」

とある。阿弥陀仏の名号を執持すること一日乃至七日すれば、かならず極楽にうまれることが出来るというのである。いままでも、阿弥陀仏の名を称えることをすすめて、

専称名号とか一向専修とかいう言葉がしばしば使われて来た。しかし、専称、専修といわれるゆえんのものという意味は、実にこの、阿弥陀經の「執接名号」ということにあったものである。梵語からの訳によると「彼の世尊無量寿如来の名号を聞き、聞きおわりて思惟し」というのだし、チベット語からの訳も「世尊無量寿如来の御名を聞いて、聞いてからも念じて」となっている。宗祖は執持名号とはこれ正しく念仏を修するなり。またいわく、一心にかの仏の名号を称念するを名づけて念仏となす」といっておられる（阿弥陀經釈）

要するに、心をこめて一心不乱に仏名を称すること、虎とみて無中で矢を射る心で念仏する。この念仏の力がそのままに、その人を極楽往生にまではこびゆくのである。ところで、同じ「執持」でも、「執念」でもここを凝らす中心点がまちがうと、とんでもないことになる「コケの一念」といって、少し脳の弱い者が何かの拍子で思いつめると、とんでもない大事を引きおこすことがある。同じ思いを凝らすなら、良いことに凝らさねばならぬ。仏道修行の場合でも同じで、同じく「執持」するのなら、正しく、あやまちのない、しかも効果の多いものを執持すべきである。その点で、「念仏」は完全無欠のものといえよう。な

ぜなれば、念仏には「多善根福德因縁」があるからである。それは阿弥陀仏の「本願の念仏」だからであると、善導大師は教えて下さっている。仏の名をとなえることが「多善根」であるということは、現在伝わっている阿弥陀經にはぬけているが、中国の湖北省襄陽の竜興寺にある石碑に刻まれた阿弥陀經には、一日乃至七日の間、一心不乱に念仏をとなえるという文句の次に

「もっぱら名号を持して、名を称するを以ってのゆえに諸罪消滅す。すなわちこれ多善根福德因縁なり」という文字がはいっている。後世の学者は、これはあとで

つけ加えたものだとか、あやまって伝えられたのだとかいっているが、そうした学問上のことはとに角として、宗祖はすなおにこれを認められており、清盛の息子の平重盛はそのようなありがたいお経を是非手に入れたいと、当時としては大変遠方の中国にまで使者をやって、現にそれが筑前の宗像神社に伝えられているという。そうした信仰的価値をこそ、尊重すべきではなからうか。そしてまた、そのような信仰の力があってこそ、岩に矢が立つことにもなるのである。

一、鼻をなめる

「簡単なことほどむずかしい」とよくいわれる。「踏切

りを渡るときは一時停車せよ」この簡単なことが守れないばかりに、自分のいのちはむろんのこと、何百人という大勢の人のいのちを危うくするのである。外出から帰った「ウガイをして手を洗う」この簡単なことをついおこたったばかりに、流感にかかって十日もねこんでしまう。「簡単」が簡単でないところに、人生のむずかしさがあるようである。

それというのも、一見簡単にみえることほど、かえってそのうらには、ふくざつなものがひそんでいるのである。

数学については何の知識もないのだが、人の話にきいたところによると、一に一たすと二となるという、この一番簡単な公式も、それでは、一に一をたすと「なぜ」二になるのかということを経明するには、大変むずかしい、高等数学が入用であるとのことである。幼稚園の子供でも知っている簡単なことでも、その本当の意味を理解するには専門の学者でも頭をなやますものである。ローソクが燃えて段々にへってゆく。この簡単な出来ごとについて、「ローソクの科学」という一冊の本を書いた科学者もいるほどである。

「ナムアミダブツ」とお念仏をとえさえすれば、どんな悪人でも極楽国に往生することが出来る。これ程簡単な

「仏法」はないのだが、その裏には宗祖が選択集を書かれたのをはじめ、多くの祖師達のばく大な教説がかくされているのである。しかし、そうだからといって、そんなむずかしい裏の意味を、とや角いったのでは宗祖のいましめである一枚起請文の、「もろこしわが朝の、もろもろの智者達の沙汰し申さるる觀念の念仏」や「学問をして念のこころをさとりて申す念仏」になっちゃって、祖意に反することになる。ここは、そうしたことに一切かわることなく「一文不知の愚鈍の身」として、すなおに、お念仏をとえさえすればよろしいということにしておかなければならないのである。

「念仏をとえなると、なぜ、極楽往生が出来るのか」どうしてもそう思うひとのために、宗祖はこの章、すなわち第十四章「六方恒沙の諸仏余行を証識せず、ただ念仏を証識したまうの文」をお書きになってるのである。その意味するところは、

「一心不乱に称名すれば往生出来る」ということは、簡単なことではあるが、理窟の上からはこれを信ずることはむずかしい。したがって、一般の人々の念仏信仰をすすめるために、阿弥陀仏の本願力の不可思議力をほめたたえたと同じように、東西南北、上下の立方に無数においでになる

みほとけたちも、阿弥陀仏と同様、念仏のまことなることを証明し、他の所行は証明されないのであるから、疑うことなく念仏にはげみなさい」

と教えたとされているのである。前の号で「正副保証人」のことを述べたが、ここでは証人の数が二人どころでなく、無数にふえているのだから、もう少しの疑う余地もないことと明らかである。

仏さまの「証明」の仕方はわれわれ人間のように、宣誓をしたり、ハンコを押したりするのではない。そんなことをしても、時には「偽証」などといって、うその証明をする者もいる。仏さまの証明の仕方は、もっと身近かで、いつわりのない仕方である。御自分の舌（した）を出して「三千世界」をおおいつくして、自分のいわれたことばのいつわりでないことのあかしとされるのである。しかも、万一、そのお言葉どおりにならず、一人でも念仏往生の出来ぬものがあつたなら、その舌は再びもとの口の中におさまらず、ついにはただれ腐ってしまうというのである。出した舌がもとにもどらず、腐ってしまうとなれば、これはウカツに出せるものではない。しかも一人二人でなしに、無数の仏さまがすることなのだから、大地を金鎚で打つほどにたしかなことこの上なしである。

仏さまには、われわれ人間とちがって、色々の瑞相がある。額の真中に、白毫（びやくごう）という白い光りが輝いているし、らほつといって、頭の天辺が一段とよりあがっている。そういった瑞相が三十二あるとのことである。ここで問題になっている、証明のための「舌」も、またその一つである。

普通の人間だと、「舌が長い」というと余りいい意味ではなく、「自分の鼻がなめられるとドロボーだ」などといわれるが、仏さまは鼻どころではなく、自分の額まで及ぶといわれる。しかし、これは普通の人間世界でのことで、仏さまの世界、宗教の世界では、そういったせまい人間のはからいを越えて、三千世界をおおうような、広く大きい仏さまの舌につつまれて、信じがたい念仏の信仰を、すなおにうけとって安隠（あんのん）に生きてゆくのが念仏者の本道である。

三、ボディー・ガード

法然上人の弟子、真宗の開祖の親鸞聖人のことばに、「一人いて悲しい時は二人いると思え。二人いて悲しい時は三人いると思え。その一人は親鸞なり」とある。一人切りで生きて行くことはつらいことである。悲しい時はむろんのこと、うれしい時も、やるせない時も、一人切りで黙っ

ていることは耐えられぬつらさである。そうした時、誰か、自分のかたわらにいます。影のように身にまといついていてくれるものがあれば、人の心は明るくなる。それが、ただの人間でなく、みほとけであつたならば、これほどに力強く、たのもしきことはない。親鸞聖人はこのことをいっているのである。

念仏の行者とても、いま、即刻に往生するのではない。仏の来迎にあずかつてかの国に往生するまでは、やはり肉身の、この世の生活を送らねばならない。たべて、働いて、ねむる、現実生活の幾年かを経なければならぬ。ところが、この現実の娑婆世界を生きるのはなみなみのことではない。名利に誘われ、物欲にまどわされ、肉欲に耽溺して、すこしでも油断すると、折角の「念仏生活」はさまたげられ、中絶してしまふ。したがって、念仏というものは、死んだ後に極楽に往生出来るというだけでなく、生きているうちでも、念仏さえしていれば、確固たる信仰生活を堅持して、無事息災にくらすことが出来なければ、安心して念仏に専心することも出来ぬというわけである。そこで、第十五章に

「六方の諸仏、念仏の行者を護念したまふの文」

とあつて、六方無数の諸仏が念仏行者の毎日の生活をまも

って下さることが説かれているのである。いまその内容を少しくみると

「……もし男子女人ありて、七日七夜及び一生を尽して、一心に専ら阿弥陀を念じて、往生を願すれば、この人つねに六方恒河沙等の仏、共に来りて護念したまふことを得るが故に護念經と名づく。護念經というところは、またもろもろの悪鬼神をして便^{たより}を得しめず。また横病横死、横に厄難あることなく、一切の災障、自然に消散す。……」

「……もし阿弥陀を称礼念じて、かの国に往生せんと願すれば、かの仏はすなわち無数の化仏、無数の化観音、勢至菩薩をつかわして行者を護念す。また前の二十五の菩薩等と、百重千重に行者を囲遶（いねう）して、行住坐臥、一切の時処を問わず、もしは昼、もしは夜、常に行者をはなれたまわず。……」

とあつて、念仏にはげむものには諸仏が護衛してくださるから、悪神や鬼も手を出すことが出来ず、不慮の災害や病氣にもかかることがないというのである。念仏者には、目に見えずとも、無数の諸仏諸菩薩が十重二十重（たとえば）にしっかりと守っていて下さるのだから、この世にある間は、安心して念仏生活をつづけることが出来、命終れば、瞬時にして極楽往生がかなうのである。（文学博士）

最新刊 浄土トラクト

村瀬秀雄著

月影抄

御法語の栞り

本誌「扉の御法語」として毎月執筆中のなかから著者が七篇を選んで解説を付して新らたに浄土トラクトの一編として刊行

目次

- 一、上人のご日常（われ聖教を見ざる日なし）
- 二、浄土宗の意義（われ浄土宗をたつる心は）
- 三、道を求む（かくの如くして昨日もいたづらに暮れぬ）
- 四、決定の信（我は烏帽子もきぬ法然房也）
- 五、弥陀名号の功德（無礙光とは）
- 六、信仰のすがた（つみは十悪五逆のものも）
- 七、念仏を勧める（不軽大士の杖木瓦石を）
- 八、あとがき

東京都千代田区飯田町二ノ八

申込先 法然上人鑽仰会

振替東京八二一八七番

B 6 版	十六頁
定 価	十五円
送 料	十円
二十部以上五分引	
五十部以上一割引	
百部以上一・五割引	

◇日日の修養と無言の布教◇

修養ひめくり

価 格 100 円 送料実費

（10部以上割引あり）

美麗2色刷 32枚綴 上質紙使用

法要その他の記念品に最適（箱入・寺名等刷込の相談に応じます）

申込先 東京都千代田区 飯田町2の8 法然上人鑽仰会 振替東京 82187 電話(332) 5944

「浄土」講読規定

一部 定価 金五十円

（送料 六円）

会費一力年 金六〇〇円

（送料 不要）

浄 土 五月号

昭和十年五月廿日

第三種郵便認可

昭和三十七年四月廿五日 印刷

昭和三十七年五月一日 発行

定価 五十円

編集人 村瀬秀雄

発行人 佐藤密雄

印刷人 関 二三男

印刷所 新光社印刷株式

会社

東京都千代田区飯田町二ノ八

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京三三二局五九四番

振替東京八二一八七番

浄土宗聖典

定價 送料
一、三〇〇 一二〇

法然上人研究

仏教大学編 一、〇〇〇 一二〇

親鸞と法然

高千穂徹乗著 一八〇 四〇

一遍上人法語集

武田賢善編 三八〇 八〇

法然上人御一代記

大富秀賢著 一〇〇 五〇

元祖法然上人御法語

折本 二五 一〇

京都市下京区(中央局区内)

上珠数屋町烏丸東入

仏教書林 西村為法館

電話 351 三三三八番

振替 京都五六四八番

日本一の生産・設備

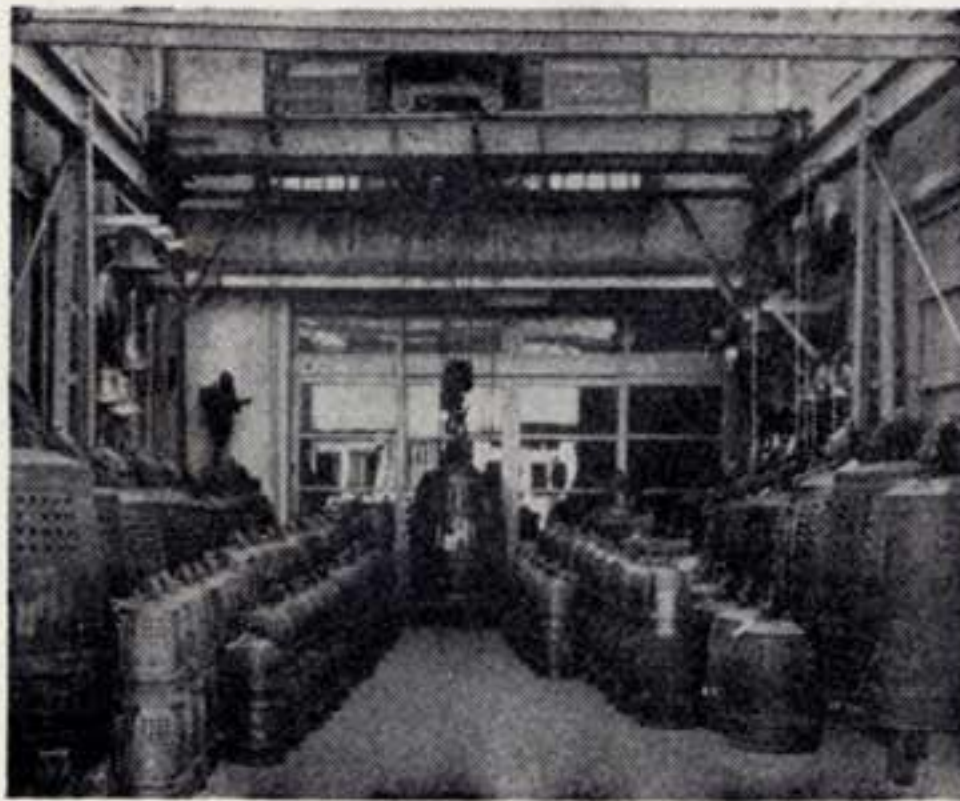
梵鐘 (45cm~85cm)

在庫豊富

喚鐘 (12cm~51cm)

音響物理学博士青木一郎先生

梵鐘界の権威 日展参事 芸術院賞受賞 香取正彦先生



日本最初の黄綬褒賞
(昭和三十年四月廿七日)

鑄物師 老子次右衛門翁

大阪市北区曹根崎町一丁目

大阪ヨリ十五分(梅田新道大映横東へ一丁右側)

株式会社 老子製作所 大阪支店

電話大阪 341 8847番 本社工場 高岡市横田